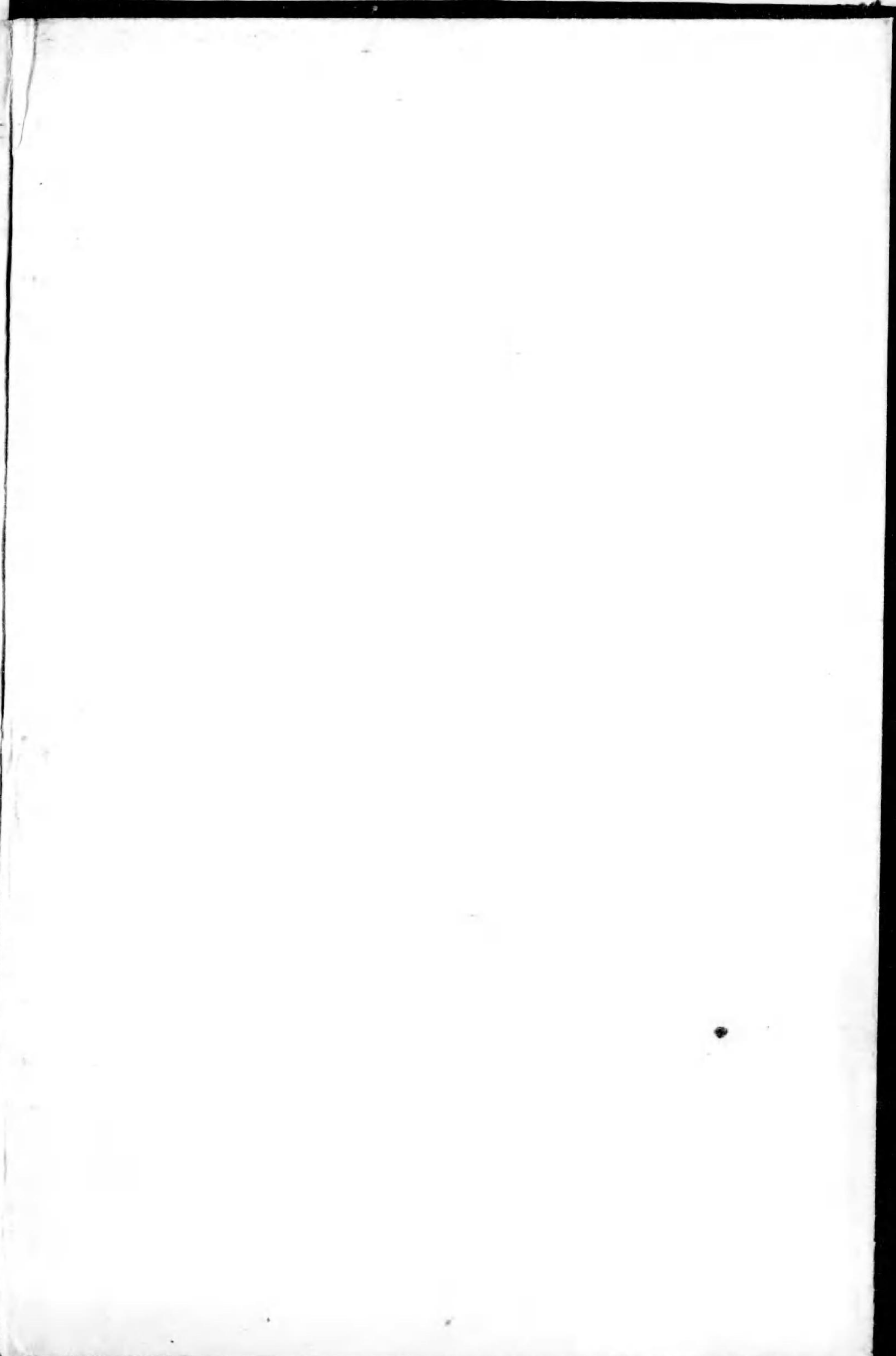
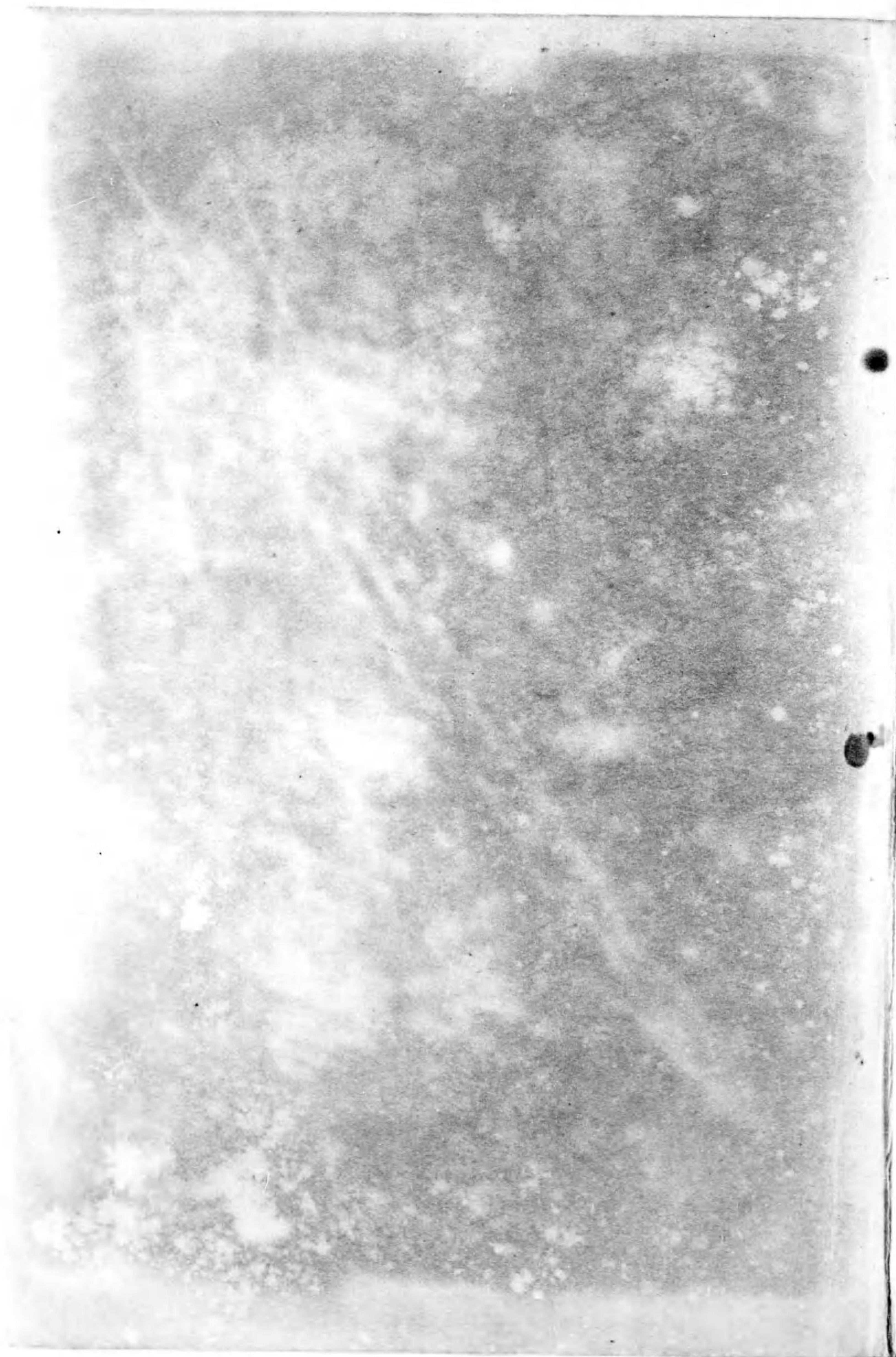


0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 ¹⁸/₇₀ m 1 2 3 4 5

始





特106
607

兩性の性慾及其差異 目次

第一章 緒言

靈肉の十字的關係…………… 一

人生と性慾…………… 二

第二章 性と性の進化

性の起原…………… 三

雌雄と男女…………… 七

生物と性慾…………… 八

第三章 性慾に於ける一般的考察

兩性の性慾及其差異



一

三

七

八

2

本能の流露……………九

性慾の本性……………二

性慾と内分泌……………四

腦下垂體の内分泌……………二七

甲狀腺の内分泌……………一九

松葉腺の内分泌……………二〇

内分泌と腦の働き……………三三

性に關する羞耻……………二四

性慾と裸體……………二五

性慾的裝飾……………二七

羞耻と性的誘惑……………二六

性慾に關する女子の羞耻……………三〇

3

接吻と抱擁……………三三

性慾の對象と容貌……………三四

季節と性慾……………三六

性慾と生殖慾……………三八

性慾と賣淫……………三九

性慾の濫費と花柳病……………四三

變態性慾……………四五

(附)半陰陽……………四八

第四章 性慾生活の發達

收縮作用の現象……………五三

接觸作用の現象……………六

兩性の性慾及其差異

兩作用連結の現象……………

九

自瀆及び射精……………

一〇

春機發動期……………

一一

第五章 男女性慾の比較

男女性と其性情の差……………

一六

男女性慾發現の差異……………

一三

女性に於ける性慾の分類……………

一四

女性の性慾と男女の性慾……………

一七

第六章 變態性慾に於ける男女の比較

性慾の病的發現……………

一八

同性間性慾……………

二〇

性的狂崇……………

二二

殘忍性色情……………

二三

被殘忍性色情……………

二四

陰部露出症……………

二四

獸姦……………

二四

(附)早熟性慾……………

二五

女性間に於ける同性愛……………

二五

同性愛に耽る女の型……………

二六

同性愛の實例……………

二九

女の變態性慾の實例……………

二七

第七章 男女性の争闘

自然的生活……………

二九

兩性の性慾及其差異

性の争闘の萌芽……………一七〇

壓倒されし女性……………一七二

宗教賣淫の起原……………一七三

婦人の掠奪、賣買……………一七五

希臘の婦人奴隸……………一七七

希臘の家庭の婦人……………一七九

女性の屈服と墮落……………一八一

宗教も女性を救はず……………一八三

中世に於ける女性尊重……………一八五

男性の叫べる自由平等……………一八六

女性の叫べる自由平等……………一八九

第八章 近代思想家の兩性觀

婦人問題は何れの時代にもあつた……………一九三

グージの兩性觀……………一九四

ミル及びベーベルの兩性觀……………一九五

エレン・ケイの兩性觀……………一九七

カーベントンの兩性觀……………一九八

シヨアの兩性觀……………一九九

兩性の性慾及其差異

醫學博士 羽太 銳 治 著

第一章 緒 言

靈肉の十字的關係

男女「性」の關係に就いては、「性」の特質と云ふものを認めない議論と、その特質を認め男女性情の差異を認めて居る議論とがある。

男女の性情に差異があると云ふことは、又その性慾にも差異があると云ふことになり。性慾の差異は、男女の天分の差異に非常な關係を有して居る。

兩性の性慾及其差異

性慾と云ふものを汚穢な、卑しいものであるとばかり考ふる時代は既に過ぎた。性慾が肉にのみ終始するならそれは卑しいことであるが、靈と肉との十字的關係に於て高い道德的に引上げられた戀愛となるのである。

男女の結合は戀愛に依らねばならぬと云ふことも、今日あまりに判り切つた事である。尙ほ此點に就ては、最後の章である、『近代人の兩性觀』に於て述べるが、哲學者カントは「男女は相合して始めて一個の人間となるもので、男子ばかりでは半分の人間であり、女子ばかりでも半分の人間である、男女を一體として始めて完全な人間となるのである」と云ふて居る。倫理學者のパウルゼンなどは、男女兩性の區別を極端に認めて居る。

斯様に男女兩性の間に差異があり、それが結合されて一體の完全なものとなるもので、其の結合が戀愛に依つて成就し、戀愛は性慾に立脚して靈と肉との十字的關係を有するものであることを知り得るならば、性慾殊に男女に於ける性慾の差異に

就いて知つて置くと云ふことは、決して無益なことではない。

人生と性慾

以上に述べたところから、推して考へると、性慾と云ふものが、人間の生活にどれだけ深刻な意義を有して居るか判るであらう。

故に、性慾に關する正しき智識を得やうとすることは、現代人の心の底からこみ上げて來る要求である。

私は此の要求に應じて、なるべく判り易く性慾の智識を普及せしめ様と、性慾に關する種々なる著書をなしたが、茲に又、性の起原、男女性の進化、性慾の概論、男女性の争闘、男女に於ける性慾の差異、女性の變態性慾、近代思想家の兩性觀等、男女性慾の差異を中心とし、それを諒解するに必要な事柄を記載して、讀者に

兩性の性慾及其差異

第二章 性と性の進化

性の起原

性の起原は、厳密なる意味に於て、單細胞生物の單細胞内に由來するものである。單細胞生物と云ふのは、一個の生體が只一個の細胞より成立する極めて微細なる生物を云ふのである。例へばアメーバ、草履虫、夜光虫、ツリガネ虫、緑虫、虫藻の類は是に類する。そして是等單細胞生物中、雄と雌とを區別することが出来るものならば、それを原始的雄性體、原始的雌性體と稱して差支へないであらう。單細胞生物は、顕微鏡的なる、極めて小なる生物である故に、其の雌雄を區別す

るものがなかつたが、近年池又は沼の水草に附着せるツリガネ虫に、此の雌雄の區別あるを發見した。ツリガネ虫が通常水草に附着せる形は、柄を以て互に連繫して生存するものである故、遂には樹の枝の如く群體を造るに至るものである。然るに生存を永續するには時々接合するの必要がある。接合するには必ず血縁の稍々遠きもの同種に限られ、同族の虫又は群體の分裂によりて繁殖したものとは決して接合しない。夜光虫、草履虫等の如きものにあつては、遊離して居るものである故、接合時には容易に系統を異にする同種の虫と接合することが出来るけれど、連繫して群體を造つて居るツリガネ虫にあつては、接合するには雌雄は二疋共動く、又は遊離しなければ系統を異にせるものと接觸する機會はない。併しツリガネ虫は接合の時に至れば、分裂生殖によつて二種類の個體を生じ、比較的身體が大きくして滋養顆粒を含有して居る一方は、群體の枝より分離して水中を游走し、他の群體に達して其處に相手を求むるものである。又一方分裂せる小さき虫は、系統を異にせる比較

的大なる虫の体内に潜入してこれと融合する。

斯様に、ツリガネ虫には形、舉動を異にするものがあり、その相違は恰も高等動物の配偶、即ち卵と精糸との相違と類似し、其の大なる方を雌と稱し、小なる方を雄と呼ぶのである。

ツリガネ虫の雌雄よりも、一層興味を感ずるものは、ウードルーフ、エルダマン兩氏の研究であつて、氏等は單細胞生物なる草履虫を、一度も接合作用を爲さしめないで、四千五百代まで分裂を繼續せしむる事が出来た。此事實は草履虫の子孫保存には、必ずしも、接合作用を必要とせざるを裏書とするもので、其等の草履虫は無限に生活する力を有するものであらう。

以上ツリガネ虫及び草履虫の觀察に依るが、性の起原は疑ひもなく單細胞生物の單一細胞内に由來するものであることが確かめられる。

雌雄と男女

性の起原は、單細胞生物の單一細胞内に由來するものであるが、單細胞生物を除ける有組織生物の性は、原始的雄性と原始的雌性との癒合の結果、多細胞生物の雄性及び雌性を生成したものであらうと思はれる。

少數の單細胞生物を除いた、多數の多細胞生物の個體生活の初めは、二個の生殖細胞(卵と精糸)の融合に依つて成れるものである。就中、有性生殖を營む動物にあつては、最も完全なる受精作用に依つて新體を生成する。従つて無性生殖を營める單細胞生物の雌性の遺傳と、多細胞生物であつて有性生殖を營む高等動物の、受精作用に於ける遺傳關係とは趣きを異にすることが明かである。のみならず、等しく完全なる有性生殖を營むものと雖も、人類の男女性と動物の雌性とは其の遺傳關係に於て歸趣を異にするものがある。故に動物の複合雌性を略して

兩性の性差及其差異

普通に雌雄性と名づけ、人類の複合雌雄性をば男女性と呼んで居る。

生物と性慾

生物の雌雄の間に於て戀愛關係の認められるのは、餘程進んだ高等な生物になつてからのことである。ウニとかヒトデとかナマコと云ふ様なものは、多細胞の生體であるけれども、その生殖方法は割合に簡單なもので、まだ雌雄兩性間に戀愛と云ふやうなものは發生しない。ナマコの場合に就て説明すれば、その雄は煙の様な白い精虫を吹き出すと、雌は卵を吹き出して、海水中に於て精虫と卵とが結合して一緒になる。併しナマコの雌と雄との間には、相慕ふと云ふことも、相合するやうな作用もないのであるから、勿論戀愛と云ふやうなものはない譯である。然るに魚類に至れば雌雄が相接近して生殖を営むやうになるけれど、其の方法は唯雌が卵を生め

ば雄がその上に精液を注ぐだけである。けれども兎に角雌雄が接近して生殖を営むのであるから、それ等を性慾及び戀愛の萌芽とも云ふことが出来やう。

更に鳥類に至れば、その雌雄の間に戀愛關係の成立を見ることが出来、従つて性慾的事實をも認めることが出来る。

彼の小鳥が巢を作つて、卵を産んでそれを暖めるやうになれば、雄は雌の爲めに食物を求め來るのみならず、歌をうたつて雌を慰めたりする。そこに美しい戀愛的關係が見られる。又鶏の雄が他の雄と雌を争つて、嫉妬的の鬭争をすることに依つて、その性慾的事實を窺ふことが出来、又それ等を仔細に觀察すると、雌と雄との性慾の差異をも知ることが出来る。

第三章 性慾に於ける一般的考察

本能の流露

兩性の性慾及其差異

第三章 性慾に於ける一般的考察

人間の性慾本能に就きては、古來より諸種の説があるが、その古くより行はれたところに依れば、性慾は排泄本能であるとされ、モンテーン、モーア、フェレー等の諸氏は此説を是認して居る。即ちこれを詳言すれば、精液の蓄積したるものを排泄せんとすることが、性慾本能であると考へられたのである。

此の種の説は主として自然科学者の唱ふところで、ヘルマンは性慾は充滿せる胚腺より出づる壓迫反射であると定義し、レーウエンフェルトは性慾とは特殊なる生殖的快感を求むる慾望と、生殖機關より生ずる不快の感覺を去らんとする慾望とより成れるものであると云ふて居る。

其等の諸説は、單に自己の感覺にのみ訴へた主我的のものであるが、人類と云ふもの、關係を廣く見渡して、そして性慾本能に就いて説いたものにウエーベルがある。ウエーベルは「人間の性慾はもと種族の保存の爲めに起りたるものなれども、其の發顯の目的及び形態は爾後變化して、其の根本の狀況より相異りたるものとな

るに至つた」と云ふて居る。

性慾を以て排泄本能と做すものは、性慾生活の主要目的は排泄的快感を満足せしめんとするにありて、生殖と云ふことを決して主として居ない。併し性慾本能から人間が未來の種族に關して豫想し觀念することを全然控除することは出来ない。例へば結婚すれば必ず子の生るべきことを豫想し、業務を勵み金銭を貯蓄し、其の子を立派に教育すべく準備を整へ、茲に初めて結婚し、子女を得てそれを充分に教育する場合の如きは、單に排泄的快感を主とせる性慾行動ではなくて、人類に最も必要な生殖であつて、性慾本能を完全に遂行したものである。

性慾は本能の流露であると云はれて居る。併し流露と云ふことは、必ずしも放恣と云ふことではない。若し極端なる快樂説を取りて、性慾は只性的本能を満たさんとするのみの慾望であるとするならば、それは人類の尊さを傷くるものである。

性慾の本性

性慾に關する從來の思想は随分謬つて居つた。從來性慾と云へば直ちに煩惱罪惡を聯想した是れ迄の多くの宗教家、道德家は皆性慾に對しての謬想に囚はれて居り佛教の教ゆる解脱と云ふことも、性慾から脱離することが最も重要なものとされ、基督教の稱する救ひと云ふものも、性慾から救ひ上げるといふ意味が、その重きをなして居つた。それで、佛教の僧侶も基督教の（舊教の）僧侶も、身の清淨を保つ爲めには、性慾から離れねばならない、それには獨身生活でなければならぬ、婦女を見る事は大の禁物である。又世俗と交ると罪惡の誘惑となるから、寺院會堂に身を歿して、世間とは全然隔離し、そして性慾を脱離し、總ての罪惡から離れねばならぬと思惟した。

性慾は左様に劣惡、卑賤なものであつて、單に惡の基礎をなすだけのものであら

うか、それは性慾を縦斷せる半面のみを見たもので、他の半面を見ないから起つた謬りである。

一體性慾は、人間の人間たるに無くてならぬもの、即ち人間生活の基礎となるものであつて、人類の光輝ある進化の源は、性慾の結果に依ると云はれて居る。是れに就いて「人類の進化の歴史は、男女兩性關係の歴史即ち性慾の事實である」と云ふた人のある程、人間生活の基礎をなして居る。

そして人類の性慾生活は、他の高等動物と異り、年中不斷のものであるが、人間に於て其の人類、文明の程度等に依つて、性慾情態は一様でない。例へば亞弗利加黑人及び東印度人は、十歳乃至十二歳で性慾發動期に至り、瑞典及び諾威人は十五歳乃至十六歳で發情期に達する。

獨逸のグリークルが、伯林の女子六千四百八十九名に就いて調査した所に據れば十四歳より十六歳の間に初めて經水を見るもの最も多く、平均して十五年一月であ

る。又シユリヒチングがバイエルンの女子一萬五百七十人に就いて調査した成績は十四歳より十八歳の間に初めて月華を見るもので、其の平均は十六年一ヶ月である。本邦の婦人にありては統計上平均十五年一ヶ月で發情期に達するものである。本邦人と雖も又是れを區別すれば、本土人、アイヌ、琉球若しくは臺灣人との間自ら性慾發起に遅速がある。又都會人と田舎人との間にも差異があり、前者は後者より一般早熟である。此の様に性慾状態に差異を生ずる原因を概括的に言へば、自然淘汰並びに智的淘汰により進化したるによるものである。

以上性遂發生の時期を述ぶるに、主として女子に就いて述べたのは、男子の性慾現象は、女子の如く特殊の特徴を数字的に窺ふことが出来ないから、女子に就て其の数字的標準を擧げたのである。

性慾と内分泌

性慾と生殖腺の分泌との關係を述べる前提として、少し腦の働きに就て説明しなければならぬ。

腦、それは云ふ迄もなく神経系統の中樞である。

神経系統は動物特有の器官で、感覺とか、運動とか、其他精神機能と名の付くもの、働きは、是れに依つて主宰される。そして神経系統を傳道器と中樞器との二つに分ける。傳道器と云ふのは神者纖維、中樞器とは神経細胞の堆積である所の腦髓や背髓を云ふのである。

例ふるならば、神経系統は電信の様なもので、神経纖維は電導線、腦髓は電信機とも云ふべきで腦だけでは決して主觀的精神内容、即ち感情の如きものは生ぜず又客觀的精神内容にしたところで、外界の刺戟がなければ生ずるものではない。丁度電氣が電導線を傳つて來て、電信機がヤス／＼と働く様に、外界の刺戟、例へば神経纖維の末梢装置が、光線、音聲、温熱其他器械的或ひは化學的の刺戟を受く

第三章 性慾に於ける一般的考察

れば、それを腦に傳へるとして腦が働くのである。

斯様に腦は常に外界の刺激のみに依つて働くばかりでなく、亦内部からの刺激に依つても働く。而して内部からの働きとは何であるか、それは内分泌若しくは其他に依つて生ずる化學的刺戟素に依るものである。

殊に性慾は、生殖腺の内分泌に依つて腦が刺戟せられ、そして働きを起すものである事が近來の研究に依つて知られて來た。

そこで、内分泌とは何であるか、又内分泌と腦の働き殊に性慾との關係に就て説明をなすべき順序にまで進んで來た。

内分泌の最初の研究は十九世紀の終りに、ブローン・セカールと云ふ學者が、睾丸越幾斯を自分の身體に注射して、其効能に驚いたのが始まりである。從來は身體内の分泌腺は、體外に一定の分泌をなすものであるとされて居つたが、セカールはそれらの腺は單に身體外のみならず、身體の内即ち血液の中にも亦一定の物質を分

泌すると云ふ一新説を唱へたが、この新説に賛成するものがなかつた。そこで、當時七十二歳の頽齡にあつたセカールは、飽く迄自説の眞實である事を證明せんと、動物の睾丸浸出液即ち睾丸越幾斯を自分の身體に注射したところが元氣が増し食欲が進み、仕事の能力も多くなり、睾丸が健康を増す所の物質を分泌する事を證明する事が出来、且つ其の効果の偉大なのにセカール自身すらも驚いた。

それから、内分泌に就ての學者の研究が盛んになり、最近二十年間に於ける其の研究の進歩は非常なものである。

腦下垂體の内分泌

内分泌腺の主なるものは、甲状腺、副甲状腺、胸腺、副腎、腦下垂體、松葉腺、睪腺、生殖腺(男子に在りては睪丸、副睪丸及び攝護腺、女子に於ては卵巢、子宮

兩性の性慾及其差異

及び其の附屬臓器)等である。

右の内、脳下垂體は大脳の下部、視神経交叉より少しく後方に下垂する球形の臓器であるが、其の分泌は、性慾の原動力を示すものとせられ、其の分泌が旺盛であれば旺盛である程生殖器の發育を促すものである。小兒時代も此腺の機能が盛んであれば全身殊に生殖器が發育し、色情の發達も迅速で所謂早熟となるものである。

此の脳下垂體の病氣に「アクロメガリー」、即ち四肢肥大症と、脂肪性生殖器萎縮症との二つがある。「アクロメガリー」は脳下垂體の變化に依つて起るものである事を發見したのは、佛蘭西のマリーと云ふ學者で、又脂肪性生殖器萎縮症、即ち生殖器の發育が極めて悪く、丁度子供の生殖器の様な状態にあつて、そして身體の大部分否身體の全部に脂肪が沈着して肥満を來たす病氣の研究をして、そう云ふ病變は矢張り脳下垂體の障礙から來るものである事を發見したのは獨逸のクレルヒと云ふ學者である。

甲状腺の内分泌

甲状腺は氣管の前に於て左右の側葉部と、これをつなぐ狹部とから成つて居る。そして其の中から出来る物質を血液の中に送り出す、其の物質が全身に廻る。

此の甲状腺の機能と性慾の關係に就ては、餘程前から注意され、女子の生殖器と一定の關係があると云ふ事が考へられた、即ち月經時、妊娠時、又月經閉止時に甲状腺の肥大を見ることが多く、又卵巣摘出後には甲状腺が肥大する。其他甲状腺肥大症の場合には卵巣の機能減弱し、不妊症を來す事が多い。

子供の時代に甲状腺を摘出してしまへば、全身の發育が障害せられて侏儒になり、従つて生殖器の發育が不良であり、年頃になつても子供と同じ状態で居る。即ち男子は睪丸が小さく、女子は子宮が大きくなる。且又月經も見ない。併し甲状腺

第三章 性慾に於ける一般的考察

が無くなつた場合、脳下垂體が多少其働きを補ふ。所謂代償的に大きくなるものと考へられる。

甲狀腺が異常に發達して、内分泌が盛んになり過ぎると、甲狀腺腫大（バセドー氏病）を起す。此病氣に罹ると眼が飛出で、咽喉が脹れ、甚だしく興奮し非常に多辯となり、さほどでも無い事を可笑がり、且つ好んで色慾に關する談話をなし、房事過度に陥る様な事もあり、女に於ては子宮出血を起す事がある。

松葉腺の内分泌

松葉腺の内分泌は生殖器の發育を抑制せんとする作用を有する。松葉腺肉腫などの爲めに内分泌が妨げられた小兒の生殖器が、異常の發育をなし居る事が屢々ある。

次に生殖器の内分泌に就て述べやう。

睪丸の内分泌に關しては其の研究報告が頗る多い。セカールが睪丸越幾斯を自分の身體に注射して、睪丸は身體の健康を増す所の物質を分泌する所だと云ふたが、睪丸が内分泌物中には、攝護腺の發育を促がす可き一定の物質がある事が其の後の學者の研究に依つて判つた。

攝護腺の機能は内分泌と外分泌との二種あり、内分泌は睪丸其他の生殖器の發達を促がす性質のものがあつて、若し攝護腺を摘出すれば生殖器は其の發育を害せらるものである。

是れに依つて睪丸と攝護腺とが互に發育を促しあつて居る状態にある事が判る。彼の支那の官吏などが春機發動期前に睪丸を取り取つた場合に、成人しても生殖器の發育が悪くなり、従つて陰莖などは充分發達しない。攝護腺なども普通よりは餘程小さい。併し色情即ち性的感情は矢張り大脳の働きとして存在する。

兩性の性慾及其差異

第三章 性慾に於ける一般的考察

女子の卵巣と子宮は、矢張り男子の睪丸と攝護腺との關係と同様に、互の内分泌物の中に發育を促しあふ所の成分がある。

それから、生殖器の内分泌物は男女兩性の性的特徴の上に非常なる關係を持つて居る。

内分泌と腦の働き

内分泌其他の化學的刺戟素に依つて、腦の働くと云ふ事は既に述べたが、もう少しそれを明瞭に述べやう。

人體は微少なる細胞の集合體であつて、細胞は相集つて組織となり臓器となるもので此の各々の臓器は刺戟の如何に依つてそれに適應する能力を作るものである。そしてそれが各自専門的の機能を司り、専門以外の事に對して殆んど反應しない、

例へば眼は見、耳は聞く働をなすもので、光波に反應するは眼、音波に反應するは耳である。

腦及び神經系統を形成する所の細胞は、他の總べての細胞よりも、外界の刺戟に反應し易く、其の性質の如きも非常に複雑なる働きをなすに堪ゆる、けれども化學的に觀察する時は、神經系の細胞程分解し易いものはない、言葉を換へて云へば他の細胞よりも刺戟に對して頗る鋭敏に反應を現はすものである。例へて云へば、酒を飲んだ場合、胃や腸の粘膜を構成する細胞の反應よりも、腦を構成する細胞の反應が鋭敏に現はれる。

内分泌に於ける物質が、腦の細胞に刺戟を與へて性慾を生ずる事は、アルコールが血液中に吸収され、遂に腦の細胞を刺戟し其の反應が現はれると似たものである。併しアルコールの反應は人生に必須なものではないが、性慾は人間生活に密接な關係を有する。

性に關する羞耻

ハベロツクエリスの論ずる所に據れば、性に關する羞耻の觀念は獨り文明人のみの特有ではなく、野蠻人の間にも此の觀念が非常に發達して居る。野蠻人は男女共殆んど裸體で唯前部に僅かの糸束や、布片などを垂れて居るに過ぎないが、併し羞耻の念が發達して居ると云ふ事を數十の例を擧げて説明して居る。

性に關する羞耻の起原は、これを動物間に於ても認める事が出来る。牝犬は交尾期ならざる時に牡犬の近く時は蹲まつて尾を垂れて此れを拒む。この交尾を拒む態度は交尾期に於ても依然としてなし、牡の近づく事を拒むが如き状態をなすものである。併しながら若し牡が是れに辟易して遠かる時は、牝は牡を追ひ掛けて誘ふ、鳥類に於てはカハセミの行動が最も顯著で、雌は雄を誘ひては逃れ或ひは拒み、又誘

ひては逃れ、又誘ひては逃る、斯う云ふ行動を終日繰返すと云ふ事である。

人類にあつては、羞耻があつて初めて其處に戀の味ひがあると云ふ事が出来る。それは羞耻は女子が異性を魅する美を増すものであつて、女子は未だ性に眼醒めざる少女時代から「女の子」ではありませぬかお慎しみなさいと母親から羞耻を教へ

らるし、此の羞耻は男子に對して非常に快感を喚び起すもので、賣春婦の如きは一種の手練手管として、羞耻を装ひ男子を牽引する。併し女子が男子の羞耻に對して快樂を感じるもので、賣春婦又は年増の女などが、まだろくに異性を解せざる若き男に戀する事あるのは、若き男の羞耻の狀に快感を感じるからである。

性慾と裸體

羞耻と裸體に關して、エリスは多數の例を擧げて居るが、其の中から二三を借用

兩性の性慾及其差異

すれば、フロモンのニュージョージアンは僅かの布片を纏ふに過ぎないが、併し男女共局部を現はすことを非常なる耻辱と考へ、外人は如何にしても見る事が出来ない。

ペリユー島に於いては、女子が水を浴びつゝある水邊を、男子が通過する事を許さない、若しこれを犯すものは死刑に處せらるゝと云ふ事である。又ニューギニア島の土人は男女共殆んど裸體であるが、女子の如きは其の身體を凝視する事を甚だしく耻ぢ、斯る時には樹上に昇つて了ふと云ふ。

文明人の間では、彼の裸體を稼業とするモデル女の如きは、美術家ならばよいが其れ以外の者より見らるゝ事を耻ぢ且つ恐れる。巴里の美術研究所のモデル女は、幕の後に衣服を脱して後モデル臺の上に見られるといふ事であるが、同じ裸體で現れるにしても用意をする間を人に見せぬ事は羞耻の念があるからである。又西洋の賣春婦の或るものは、舞舞の上では殆んど裸體で踊るが、海水浴などにて身體の一

部を人に見らるゝを非常に恐れて居るものがあるといふことを聞いて居る。

性慾的裝飾

人類が衣服を着する——野蠻人が局部を蔽ふ——に至つた原因は、其の局部の皮膚粘膜が害を受け易きを防ぐのも一つの原因である。併し蔽ふと云ふ事は却つて其の部分に注意を引き、顯著にするものである。中部濠洲の或る土人の如きは、一種の挑發的舞踊をなす際にのみ、僅かに局部を蔽ふのはこの意味に於ていある。

文明國人の間に於ても、女が裸體となるのを恐れるのは、赤裸々なるは却つて美を滅殺するものである故、女子が異性の前に自己の美を滅殺する事を恐るゝの念も含まれて居る。又衣服に依りて男子の視覺の攻撃を避け得るので、女子は其下に隠れ、安心して種々なる羞耻的態度を以て男子を惑はす事が出来るのである。其の上

兩性の性慾及其差異

服装の美、香水の芳香等は裸體よりも數倍の誘惑を男子に與へる。尙ほ隠れたるものは見たい、神聖なものは瀆したいと云ふ一種の本能的の慾望が伴つて來る事が、衣服その物は女子が男子を誘惑する一つの武器となり、男子をして激烈なる戀情の發作を起さしむる事となる。

羞耻と性的誘惑

エリスの説に従へば、野蠻人と雖も公然性交を行はないのは、性交は敵に害され易い状態にあるからである。と做されて居る。これが性交に對する羞耻を生ずるに至つた原因で、動物と雖も野生のものは、大抵隠れてこれを行ひ、人に飼はるゝに至つて其の羞耻心を失ひ、公然と行ふやうになつたと説いて居る。

又ミツチエルは女子に於ける羞耻は、野蠻時代には掠奪結婚であつた爲め、女子

は常に掠奪を蒙つて居たので、それに対する防禦として羞耻は發生するに至つたものだと論じて居る。そして又多くの羞耻は教育の結果であつて、獸類のやうでない、野蠻人のやうでないといふ處から來て居る。口は物を食ふ處で是れを見らるゝは非常に耻かしい事であるとの習慣も皆これが爲めで、土耳其や亞刺比亞の婦人が口を蔽ふのは其點に於ては、歐洲人に優つて居ると云ふ事が出来る。

羞耻に就ては、女子と男子とで大に其の趣きを異にして居る、男子は一般に性に關する羞耻が少ないが、女子の羞耻は大部分、性に關して居る。是に由つて見るも戀愛は女子の全部で、男子に在つては唯其の一部に過ぎないと云ひ得る。

女子の羞耻が男子を誘惑する事は既に説いた、而して是れに依つて男子の犯罪となる事が屢々ある。英國に於て汽車中に於て婦人の犯さるゝもの多く、社會の大問題となつた時、裁判官の説として、婦人よりも寧ろ男子を保護することが急務である。何となれば女子は男子を誘ひ、これを男子の罪として告訴をする場合が非常に

第三章 性慾に於ける一般的考察

多い、斯る場合女子は男子を全く知らぬ他人だと云けれども、其實以前より知己である場合が多い、普通の時でも斯る訴へはよく訊いて見ると、過半は合意であるといふ事を舉げて居る。斯くの如き罪を誘發する一つの原因は女子は男子の性の特種な點を了解しないから來るので、女子は只一種の遊戯として誘ふては拒み、拒んで誘ふて居るが、男子はこの女子の虚偽的羞耻によりて一定の度迄挑發さるゝ時は無自覺に激發するのであるが、女子は此れを解せず終り迄斯くして戯れ得るものと信じて居る、それが爲め思はぬ結果となりて非常に憤る事となる、又は後で名譽とか、兩親の非難とか、子が生れはせぬかと云ふ恐怖から罪を男子に被せて了ふ。

性慾に關する女子の羞耻

エリスは羞耻心を解剖して(イ)牝犬の現はす羞耻の態度、(ロ)不潔を嫌ふの念、

即ち局部排泄物は嫌惡の念を起すものなるが故、其局部が他に嫌惡の情を起さしむるを恐れる羞耻の念。(これは生殖器と排泄器とを混同するの無智より、更に此の念を強めらるゝ)、(ハ)其局部を現はす時は惡魔が害ふるとの恐怖、其の恐怖に原因して其の惡魔を拂ふ種々の儀式が行はれ、尙ほ進化してその儀式が日常生活の習慣となり、これに従はざる事が羞耻の原因になる。(ニ)女子を男子の所有物となす思想、自分の處有なるが爲に他より犯さしめない、又深く歳すると云ふ意味で身體―或ひは一局處を―蔽ふ。中部濠洲の土人はまだ結婚せざる間は一の布片を纏はず、結婚してから始めて其局部を蔽ふのである。女子は娘の間は兩親の持もので、結婚してからは男子の所有物であるといふ思想で、女子は羞耻を強ひらるのである。

女子は男子の所有物であるといふ事が、一面には女子に羞耻を強ひると共に、一面には又貞操を強ふる。此の間の消息を窺ふに足るべきものは、ヘツベルの作「ゲ

イゲスと其指輪」である。それは希臘の婦人は良人以外の男子の眼から距たるべく面紗を蔽ふて居た。勿論婦人の室には良人以外の男子は入る事を許されなかつた、そして他の男子に面接せざる婦人は貞操な婦人であつた、然るにガンダウレス王は自分が絶世の美人を所有することを誇りとして、青年ギイゲスを妃の寢室に隠れしめて、妃ロドーベの嬌姿を目のあたり目撃せしめた。男子に面接することすら許さぬ時代、これを以て婦人の貞操である、道徳であるとなした時代に、婦人の寢室に若き男が忍び入りて、面紗を取つた自分の姿を見たる事を知つたならば、婦人は自分の婦徳を傷けられ辱かしめを受けたる事を嘆せずには居られまい。ロドーベは斯くしてギイゲスを呪ひ又良人たる王を責めたのである。

接吻と抱擁

下等動物乃至獸類に於ては、嗅覺に依つて性的快樂を満たすに過ぎない。併し人類の性的快樂を得る手段は、誠に多種多様であると云ふてよい。

人類に於ける性的衝動は主として嗅覺に依らず主として言語思想に依るものである、そして性的衝動が言語思想に現はるゝに至れば、此れを戀愛と稱するのである。言語思想は人類の獨り有するものである點より推す時は、戀愛は人類のみ有し得る性的快樂の手段である。

戀愛を性慾と關係なしと思ふ事は大なる誤謬である。高潔なる戀愛の外形のみを見る時は、それが性慾から生じ發展したものである事が、屢々忘れられて了ふが、戀愛と性慾とは樹木と種子の如き關係を有するものであつて、性慾なしに戀愛を生じ得るものではない。高潔なる戀愛は醇化されたる戀愛であつて、性慾を露骨にして居ないものなのである。

人類は他動物の有せざる、或ひは有して居ても誠に僅かである性的快樂を得る一

第三章 性慾に於ける一般的考察

手段を有して居る、それは即ち觸覺である。動物にあつては全身毛を以つて蔽はれて居るから、觸覺の快感が著しく妨げられて居る。併し人類は皮膚に毛を存せざるが爲め、性的快樂を得る手段が豊富になつて居る。殊に女子は一部に鋭く感ずるよりも、一體に廣く感ずる性質を持つて居る、そして乳とか唇とかの部分に甚だしく其の方面の感覺が發達して居る。即ち接吻と抱擁が戀愛に附隨して居る理由がこれでわかる。

其の他容貌とか、姿勢とかいろ／＼な事も性的快感を得ることに關係して居る。

性慾の對象と容貌

性的快感と容貌美は重大な關係を有する。これが爲め人工的に種々の容貌を形づくりに至る、それは特に野蠻人の間に於て甚だしい。例へば唇を小さい時より木片

を篋めて次第に引き延ばし、恰かも鳥の嘴のやうにし、其の長いだけを美人とするものがある。顔面に一面渦巻きのやうの傷を作つたものもある。首に針金を巻きつけて次第に首を長くし、其の長さを時には一呎にも及ばしめ、其の長いだけを美人としたものもある。其他唇に大きな輪を貫いたり、鼻に大きな木片を貫き通したり又はホツテントットの臀部の突き出たのを美とする如きもある。

斯くの如きは徒らに婦女子に苦痛を與へるに過ぎないと文明國人は嘲笑して居るが、文化の進んだ所にも此れと同じ様な事がある。支那に於いて吳王細腰を妙んだ爲めに、官女に餓死する者が多かつたと傳へられて居る。現今にしても支那の婦人は蓮歩と云ふ事を美の對象となし、纏足を施して居る婦人が尙ほ可なりある。

泰西に於ても彼のコールセットの如きを施して、婦人の人工的美を保たんとして居るが、同じく婦人を苦しめる良くない習慣である。

是等婦人が肉體的に苦痛を忍んでも、男子の爲めに容貌の美を飾るのは、永い間

第三章 性慾に於ける一般的考察

婦人が男子の玩弄物となつて居た、無自覺の遺物であると多くの學者から説かれて居る。

眞正の容貌の美は、是等の人工になるものではない、それ故今日の性的快樂に關する美の觀念を矯正して、女子が裝飾の爲めに肉體に無用の苦痛を與へない事が必要である。徒らに肉體を苦しめるよりも眞の女性美、精神美を發揮する様になさねばならない。

季節と性慾

性慾的衝動は外界との交渉及び温度等に直接な關係をもつてゐる。夏は非常に暑く人間が外氣のためにぐいぐいと壓迫される、この烈しい壓迫とそれから來る疲勞のために、性慾が萎縮して了ふのである。食物の關係から云つても、肉類のやうな

脂肪分、性慾を増す物を取らないといふことも一因である。然し夏は日本の女の美といふ點から論ずれば最も自然に歸する時であり、最も美を發揮する時である。即ち日本の女は極端に自然に背反して、われ自ら持つて生れた自然の美をぶち壊して了ふ。ぶくぶくした厚い着物、廣い帯と、肉體の完全な發育を阻害するといふのは何といふ馬鹿げたことだらう。

西洋の女は、子供の時から、いかに自然の美を表はさうと腐心して居る。子供の時分には、短い袴のやうなスカートの上に、短衣一枚着けたきりで、大人になつても、薄い木綿の肌着の上に、もう一枚の上衣を着けるのみで、腕も胸も自由に出して居る。日本の女が、もし。あの眞似をしたとすれば、直ぐに風邪をひいて了ふだらう。

ところが、夏は自然が彼等自身が造つた障壁を破壊してくれる。まづ手足、胸、乳房の輪廓、肩、腰部等、薄い單衣もの一重を隔て、十分に肉體美を現はす、しか

第三章 性慾に於ける一般的考察

し乍ら、このことが性慾を刺戟するものは「美しい」といふだけの單なる衝動を感じさせるのみで、外界の壓迫のために、根強い衝動が起らないのである。

これに反して、冬は外氣の寒さに對して吾々は相當の温度をとる必要がある。その温度、暖氣が性慾を烈しく衝動させる、猶温度をとるために食する肉類その他の食物がまた直接に性慾衝動の基因となる。また、それ以上に、冬に於ては室内に籠ることが誘引の機會を作る。

春は自然の風物から來る連想的の性慾の衝動が多い。即ちナイチンゲール、朧月夜、花の香等詩的、もしくは繪畫的の聯想を刺戟する。殊に花の香は、非常に連想的な衝動を強く惹起さすものである。

性慾と生殖慾

性慾と生殖との關係に就いては、既に述べたる所で、性慾と生殖慾との一致ない場合が度々あるが、性慾は之れを分析すれば交口慾と生殖慾との二種となるものである。

交口慾とは異性との間に於て行はるゝ所の、□□□□□□を希望するものであるが、これ□□□□□□は生理的に一種の快美感を生ずるものであるからである。

然るに人によつては交口せずとも、唯だ異性の身體に□□□□□□のみを以て満足するものもあり、又は自瀆的遂情、獸姦、屍姦、偶像姦の如き變態的のものもある。

生殖慾とは子を希望する所の慾であつて、之れ性慾の本旨とも云ふべきものである。然ればこの生殖慾は子の無き者に於て著しく、時に不妊の原因を婦人に歸し、子供無き故を以て離別せる如き例は古來珍らしくない。

性慾と賣淫

兩性の性慾及其差異

第三章 性慾に於ける一般的考察

裕ある者が其の活力を消費せんが爲めの發作であつて、一方に於ては精神的に美術の製作、鑑賞となり、他の一方に於ては肉體的に性慾食慾の飽滿となつて現はれる此意味から生活に餘裕の無い者よりも、生活に餘力のある者の方がスピール・トリップの作用の強いのは當然であつて、これが彼れ等の淫婦と交渉を有する理由ともなり、賣春婦との交渉が全く生活の餘裕から生ずる遊戯的のものであるといふ證據にもなるのである。

十九世紀の初め佛蘭西の有名な賣淫學者バレン・チニシャーレーは賣淫を下水に喩へ、不潔物に對する下水であると云ひ、トーマスは都會にある處の賣淫は宮殿の真中に雪隠があるやうなものだと云ひ、皮膚學者カポレーは賣淫は正しき結婚外の淫交を遂げんが爲めに起れる文明史上の一大事實なるを以て、吾人が歴史中にある以上賣淫を絶滅する事は到底出來ないと云つてゐる。

性慾の濫費と花柳病

近時駭々乎として社會文物の進歩すると共に、花柳病は著しく蔓延し、都會の大人の八十プロセントは其の患者であると言へ稱せらるゝに至つた。或る人は「文明の進むに従つて、性慾關係の上にて必ず其裏面に於いて危険なる狀況を呈し來るものである」と云ふて居る、尤もの言葉である。

斯くの如く蔓延せる花柳病の傳染經路は何うであらうか？、京大醫科大學皮膚科外來患者に就て調査した人があるが、その花柳病患者三百十人（男二百七十一人、女三十九人）を内譯にすれば梅毒百四十三人、淋病百二十九人、軟性下疳三十八人であつて、これ等の病者の傳染經路を區別して見ると、公娼よりと云ふもの百六十三人、藝妓よりと云ふもの三十六人、酌婦よりと云ふもの二十七人、密賣婦よりと云ふもの四人、玉突、矢場の下女其他よりと云ふもの三十四人自ら密賣せる爲

兩性の性慾及び其差異

第三章 性慾に於ける一般的考察

めのもの一人、夫よりのもの二十二二人、妻よりのもの三人、妻よりのもの一人と云ふ統計である。

斯う云ふ様に花柳病の傳染は多く公娼若しくは私娼から來るものである、(前記の統計では偶然にも私娼よりの感染が尠ないが)。斯くの如く蔓延せる花柳病は果して如何なる影響を與ふるであらうか?、こゝに花柳病の影響の恐るべきを説かん爲めプリユウの劇の梗概を示さう。

或る男が結婚の前、豫め醫師の健康診断を受けたところが、醫師は其の男に梅毒があるを診断した。男は梅毒の疾患のある身體で結婚する事が、如何に不道徳であるかを考へた。然し男は其の結婚の延期に必要な理由を説明するの勇氣が無かつた爲めに、遂に罪惡を犯すことゝなつた。そして暫らくは愉快な新婚の生活が營まれた。やがて男は新婚の楽しい夢の醒める時が來た。生れた愛兒は、先天梅毒といふ怖ろしい疾患に犯されて、乳母までが其の病毒の感染を怖れる餘り解傭を迫つた。

男の妻は始めて夫の秘密を知つて、泣いて父親に訴へ、父親は司法官に離婚を要求しやうとする。こゝに於て甘い楽しい家庭は全く破壊される。これはプリユウの劇であるが、花柳病には斯る悲劇の實例が數多くある。

賣淫は人道上から見て許すべからざる罪惡であると云はるゝのは、斯うした害毒を流すからであつて、それが爲めに賣笑制度に關する問題が屢々論議せらるゝ。

花柳病の恐るべき事實を尠なからしめんには、賣笑制度の改善元より然るべき事である。併しながら人々が性慾生活に於ける正しき自覺と修養とを得て、性慾の濫費をなさない様にならなければ花柳病の蔓延することは決して止まないであらう。

變態性慾

變態性慾とは正常ならざる性慾、不自然なる性慾の謂ひである。

兩性の性慾及其差異

第三章 性慾に於ける一般的考察

變態性慾を大體左の三種に分つ事が出来る。

- (一) 顛倒性同性間性慾、
- (二) 色情狂、
- (三) 準色情狂、

其の同性間性慾とは、同性即ち男性と男性、女性と女性との間に聯絡せられる處の性慾である。此の種のもの、中には單純なる同性々慾のみならず、男性脱化、女性脱化等の不可思議なる現象を呈するものがある。

色情狂とは性慾の異常なるもの、即ち色情に障礙を受けた精神病で、其の名の如く色に狂つて荒れ廻るものあり沈鬱にして、煩惱に苦しむものあり、或ひは屍體を姦し、動物を淫し、異性を傷つけ或ひは虐殺し、以て性慾を満足するの類である左の九種に分つて説明する。

- (イ) 性的體部狂崇
- (ロ) 性的庶物狂崇
- (ハ) 殘忍性色情(サディスムス)

- (ニ) 被殘忍性色情(マソヒスムス)

(ホ) 陰部露出症

(ヘ) 獸姦

(ト) 屍姦

(チ) 偶像姦、肖像姦

併し、遺憾ながら此書に於て、此等變態性慾に就て詳細なる説明をなすの餘裕がないから、極く其の概略だけを説明し、特殊なる婦人の變態性慾に就ては、更に以後の章に於て説明する。

準色情狂と云ふのは、純粹の色情狂でなくて、生理的にそれに近いものを云ふのである。知識の低い者、道德の薄弱な者、智徳尋常なるも克己心に乏しい者等種々ある。

以上に分類したものの中、同性の愛に就いては以後の章に述べるから、こゝには

両性の性慾及其差異

體部狂崇とは異性の體部の或る特種の局部に性的狂崇をなすもので、例へば異性の乳房、臀部、手、足、脛、頭髮等に狂崇するのである。庶物狂崇は異性の身體に着けたものに對する狂崇で、例へばリボン、櫛、ハンケチ、襦袢、腰巻、洋傘、時計、紙入等其の他種々なる庶物を見、或ひは觸れる事に依つて、性慾を亢奮し快感を感ずるものである。

殘忍性色情とは異性を虐待し、或ひはこれを殺傷して性慾的快感を満足するものである。

被殘忍性色情とは、前者とは反對に異性に虐待されて喜ぶ性慾である。或ひは鞭打たれ或は傷つけられて快感を感じ、性慾亢奮を満足するのである。

(附) 半陰陽

半陰陽者とは俗に「ふたなり」と稱し、生物學上の雌雄同體であつて解剖的にも將た又精神的にも兩性の意味を有するものである。即ち不完全ながらも男女兩性の生殖器を具備するが故に、彼れ等の性慾は取りも直さず同性々慾に當るのである。半陰陽者の性慾が同性々慾である事は、蚯蚓、蛭、蝸牛等の雌雄同體に徴しても明かな事で、同時に於て男性ともなり又女性ともなり得るのである。

半陰陽者は古昔から在つたらしく、羅馬の末葉カラカラ王時代の如き淫猥を極めた頃の彫刻中にも、半陰陽者の大理石像が多數にある。又三十年戦争前後に出た數多の諷刺畫中にも、半陰陽に關するものが頗る多い。これを以て見れば、斯るものを賞讃した時代があつたのみならず、其れが一時性慾生活の上に勢力を占めて居つた時代があつたことが想像される。

斯くの如く半陰陽者は、何時の時代にも不思議の現象とせられてゐたが、普通人間の半陰陽は一方に偏した傾きがあつて、生殖器も一方に發達したものが多し。眞

兩性の性慾及其差異

第三章 性慾に於ける一般的考察

性の半陰陽者は稀れといふよりも、先づ絶無と云つてよい。胎生學上から云へば、胎児は初め盡く兩性の具有者即ち半陰陽者であるが、發育の途中から男性か女性かの一方に傾き初め、遂に單性となるのである。此の原理から推して考へれば、半陰陽者のあるのは敢て不思議ではないのだが、今も云ふ通り眞性の半陰陽者は先づ絶無であつて、多くは假性半陰陽者である。

石橋四郎氏が、徴兵検査執行中に發見した假性半陰陽の一例を、神博士が紹介してゐる。

秋田縣高某、明治廿四年生。父母健全畸形無し。但し第二子も半陰陽なるが如し。本人は幼時より男性として取扱はれ居り。これ偏側睪丸の下降しあるが爲めなり身長五尺四寸二分、體重十四貫四百匁、骨格一般に男性的なるも、性質は温順にして女子に近く、聲音及び喉頭隆起は男子と異らず、左右の乳房膨隆して十七八歳の處女の如く、乳腺又發育し、食指頭大の塊をなせるもの數個を解知す。然れども乳

頭は全く缺如し、唯だ乳房を見るのみ、骨盤は男性と等しく、陰毛は中等量に存す外陰部は一見女子に類し、唯だ右睪丸下降によりて其の男性にあらざるやを疑はしむるのみ、精檢するに、左睪丸は腹腔内に止まつて下降せず右睪丸は大陰唇狀に破裂せる陰囊内笈下にありて大さ雀卵大なり。副睪丸も亦共に觸知するを得、陰囊は會陰縫合連續部に於て一仙米許り癒合し、夫れより上方に向つて破裂し、左右陰囊皺襞は恰も大陰唇の如くにして、唯だ其の右側は上記の如く睪丸を有するにより膨隆す。而して此の破裂は恥骨縫際の下部に達し、これを左右に口開するに小陰唇に相當する部無く、内部一般に粘膜狀にして腔口を缺く此の破裂内部の底の上三分一部に豌豆大の陰莖を有し、皮膚破裂による皺襞間に隠蔽せらる。其の中央尖端部に米粒大より稍々小なる尿道口及び生殖管口を有す、然れども陰莖海綿體を缺如す。従つて勃起を缺く、又從來色情觀念の起りたることなしと云ふ。直腸双台診はこれを行はざるも、子宮卵巢に關しては其の存在を認め難し。云々。此外にも尙ほ

多くの例があるが略す。

これは正しく假性半陰陽者である。假性半陰陽者には左の二種の區別がある。

- (一) 男性的女性假半陰陽者
- (二) 女性的男性假半陰陽者

男性的女性假半陰陽とは元來女性であつて。其の生殖器が男性的に發育してゐるものである。故に假に男性と結婚したと假定すれば、妻の任務に就いて夫婦和合すべきは當然であるが、此の種の者は往々にして其の男性的に發育した外陰部を利用して、他の女子と關係を結ぶものである。然る時は純然たる女性間同性々慾となるのである。

女性的男性假半陰陽とは前者の反對に、本來は男子であつて、其の生殖器が女性的に發育したものである。前例に示した男の如きがこれである。此の種の者も其の生殖器の發育程度如何によつて、他の男子と性交を結ぶ事が絶對に無いとは云はれない。

第四章 性慾生活の發達

收縮作用の現象

今迄の處は極めて平易な研究であつたが、以下少しく複雑な研究に移らなければならぬ。性慾現象の稍々詳細な分解研究である。

研究の對象として兒童を用ひる。何故兒童を用ひるかと云ふと、兒童の性慾現象は極めて單純で觀察するに都合よく、叙述し易く理解もし易く、且つ吾人の性慾發達の經過をも併せ知る事が出来るからである。

そこで、先づ收縮作用から説き始め、續いて接觸作用に説き及ぼし、次ぎに稍々

兩性の性慾及其差異

複雑な此の兩作用の連結現象を説いて行くつもりである。或ひは解り悪い處があるかも知れないが、前後對照してよく研究されたなら思ひ半ばに過ぐるものがあるであらう。

先づ勃起現象から説明する。

勃起は兒童には勿論乳兒にも起る事がある。時としては包皮の狹窄、陰莖の炎症等病的原因からも起る事もある。勃起は鬱血を伴ふ現象である事は成人した人間も同様で斯くの如き時は決して性的作用に支配されて勃起するのではないが、併し性慾生活に對して全然無意味であるとは云へない。

病的刺戟によつて起さしめられた生殖器の感覺は勃起によつて増加し、兒童の注意が著しく陰莖に集中する事は何人も知る處である。斯くの如き感覺の結果、兒童は陰に陽に陰莖に手を解るゝようになり、恰も他の痒い部分を搔く事を直ちに學ぶが如く陰莖を搔き始めるものである。

フリューゲル、プライエルの二家か會て重複搔痒について研究した結果、兒童は生後數ヶ月にして痒い部分を搔き得る事を確めた。故に兒童は陰莖に搔痒を感じた時、これを搔く事を手始めに自瀆を行ふやうになるのである。そして一旦此の快感を知つたが最後、なかく此の惡習から脱する事は出来ないものである。

兒童が勃起を起す原因は外界から求める事は出来ない。皆内的作用で生殖器の發達及び前章で説いた諸腺體の内分泌等に連關した有機的刺戟によるものである。斯くの如き刺戟は直接勃起を起さしめないで、兒童をして生殖器に觸れしむるものであるが、生後一才にして自瀆を強ふるが如き刺戟を生ずれば、其れは確かに病的現象である。

腦を去つた蛙は酸によつて刺戟された後脚を他の脚をもつて搔くものであるが、兒童が明白な自覺を有せずして、手又は其の他の物で外生殖器其の他の痒い部分を搔くのは敢て不思議ではないのである。

兩性の性慾及其差異

其の際既に勃起しても、又掻いた後勃起しようとも結果は同一である。児童は恰も巧妙に痒い部分を搔く事を覺ゆる如く、又快感を感ずる如く、陰莖を搔く事を覺え、一種の快感を感ずるのである。以上は主に男兒に就て説明したが、女兒に於ても同様である事は云ふまでもない。

児童は斯くの如く生殖器に巧妙なる刺激を加ふる事を自然的に知得する外に、他人に誘惑されてこれを知る場合が甚だ少くない。乳母、子守女等が児童の外生殖器を撫で、泣き止ましめんとし、或ひは遊戯的にこれを弄ぶが如き事は吾人の目睹する處であるが、児童は斯くの如き機會より一種の快感を覺え、不知不識自瀆的遂情を行ふやうになる。故に子を持つ親はこれ等の事に充分注意し、乳母や子守を監督しなければならぬ。

性的既熟の男女が性交を行ふ時は、必ず精液の射出を伴ふものであるが、児童には斯くした現象は決してない。大抵児童期の最後に於て、男性が初めて射出するも

のである。併し此の事實は然く簡單に云ひ切つて了ふ譯には行かない。(茲に云ふ児童期とは満八才の初めより満十七歳まで、満八歳の初めより満十四歳の終りまでを第一児童期、満十五歳の初めより満十七歳の終りまでを第二児童期といふ。初生兒より満七歳の終りまでを乳兒期若しくは單に幼兒期と呼ぶ)。

言既に述べた如く、精液の主なる成分は睪丸で作られるものであるが、若しフェルプスとシゲルの云ふが如くんば、睪丸で製作されるのは精子のみである。然るにマンテアツツアの研究によると精子は十八歳以前に生ずる事は稀れであり、フェルプスとシゲルの研究によると十五歳乃至十六歳の男兒の射出物中には未だ精子を發見し得ないといふ。

の併し又、フェルプスとシゲルは十二歳乃至十三歳の男兒の精液中に精子を發見した事もある。モールは児童の遺精を幾度か研究して、十六歳の男兒にも未だ精子の存在せざる事を發見した。ホフマンはこれに關し多少の材料を提供してゐる。彼れは

兩性の性慾及其差異

クローセが主張した九歳の男兒が女子を妊娠せしめ得るとの説には疑ひを挿んでゐるが、十四歳の男子には斯くの如き現象のある事を承認した。ホフマンは尙亦發育の早い男兒（肉體上には男性的素質、大なる陰莖等は）生殖力も速かに發達するものである事を發見した。併しこれにも例外がある。何となれば十四歳の虚弱な男兒の睪丸中に完全に發達した精子を發見してゐるからである。

又、十五歳の男兒二人を實驗して、陰莖と共に凡て完全に發達せるにも拘はらず一人は完全なる精子を有し、一人は全然精子を有さない事を發見した。更に陰毛を有さない十五歳の男兒二名を研究したのに、既に完全なる精子を有してゐた。然るに十八歳の或る男兒に就て研究した時は全然精子を發見しなかつた。

ハベルダが研究した時も又これと同様で、十五歳並びに十七歳の男兒にして陰毛を有しながら精子を發見しなかつた。然るに十三歳四分の三に達した男兒を研究したのに、陰毛並びに精子共に完全に發達してゐた。ハベルダはこれによつて、精子

は他の春機發動と同時に發生するものであると結論してゐる。

或る巴里の研究者と伯林の研究者とは、精子發生の最も早い時期は十三歳と二分の一であると言つてゐる。

次いで起る疑問は、精子を發生しないのに射出を行ひ得るや否やの問題であるが吾人は直ちに行ひ得ると答へる。吾人は既に精液は睪丸の分泌物のみならず、種々の腺より分泌される分泌液の混合したものである事を述べた。故に精子が未だ發せすとも他の腺よりの分泌物を射出する事は有り得べき現象である。従つて性交は生殖能力の發達するよりも以前に行ひ得るものである。

シユトラースマンは生殖能力の境界を満十五歳、性交能力の境界を満十三歳と認めしたが、兒童が褌衣其の他の寢具に遺した汚點を検査しても、決して精子を發見し得ないのに徴しても、兒童が精子を有せるは例外に屬する事が解る。

モールは七歳の兒童が尿道の自瀆的刺戟に刺戟されて、褌衣に精液を射出した事

を發見したが、勿論精子は發見し得なかつた。斯くの如き年齢で精液を射出するのは確かに例外で、普通は十二歳ぐらゐから始めるものである。又、或る教育家は十歳の兒童が木に登つた際突然滑り落ちて精液を射出して以來、幾度か此の方法によつて自瀆を行つた事をモールに報告して居る。

然らば此の精液は精子の發生する前に如何なる個所から生ずるものであらうか。精子の發生せざらぬ前に睪丸に無力分泌物の生ずる事は有り得べき事の第一である。又多くの腺から種々の分泌物を分泌する事は既に説明した通りである。併し、何時頃からこれ等の腺が分泌し始めるかは明確に知る事が出来ない。

ヘレンは、コーベル氏腺が既に生後第一週間に分泌し始める事を確めた。其の説によると、此の腺は絶えず液を分泌するけれども、平常は其の腺内に存保せられて尿と共に排出されるのであるといふ。故にヘレンはコーベル氏腺を生殖器官中に數へない。併し此の腺の分泌物は精液の合成に必要な事を發見してゐる。

次にリットレッツシエ氏腺も睪丸より前に分泌を開始するらしい。又精囊は精子の見えない以前に分泌を開始する事が確實となつた。攝護腺に至つては性的に熟した時、或ひは其れよりも幾分遅れて分泌を開始するものである。フリツシユの調査した處によると、兒童時代に比較的小さい攝護腺は性的に熟するに至つて猛烈に發達を開始するものである。兒童時代に、腺組織が非常に粗で粘着性を有するが、春機發動期に達すると完全なる發達をなすものである。エングリツシユが一千二百八十二回の實驗によつて得たる結果は、攝護腺の發達は睪丸が完全に發達した後初めて發達するものである事を確めた。何れにしても攝護腺の分泌が比較的遅れて行はれる事は確實である。

併て、今度は精液の射出状態であるが、此の作用は二種に區別する事が出来る。

(一) 調節的滴出運動によつて精液を射出する事。

兩性の性慾及其差異

(二) 發育した人間に於て認め得べき快美外尿道漏 (女子の場合には快美的粘液漏)

モールは兒童に快美外尿道漏の確證を實驗し得なかつたが、十二歳の兒童にして既に精液を射出した事を發見した。勿論これは例外であつて、其の精液中に精子を含まない事なかつた事は云ふまでもない。

女子のバルトリン腺に其の意味並びに發達上男子のコーベル腺に相當するものである。此の腺は性的未熟の女兒も既に分泌作用を行ふものである。性的未熟の女子が射出するに際し、他の腺の分泌物 (子宮、子宮頸、膺、外陰唇及び尿道の粘膜腺等) がこれに關係を有する事は後に説明する。

射出は性交の際に於けるが如く、或る筋肉の調節的活動を要するものであるが、茲に生ずる一の疑問は、射出すべき液未だ生ぜざるに筋肉活動が既に行はれ得るかといふ問題である。モールの觀察した處によると、次ぎの如く確言し得る。

或る場合には射出すべき液體が未だ發見されないのに、男女兩性共典型的な調節的運動を行ひ得る事がある。併しながら、吾人の眼に認め得べき分泌物が全然射出せられないかは又一つの疑問である。

抑も發育した人間が精液を射出する際に、調節的筋肉運動を行ふのは、或る分量の精液が尿道から抽出さるべき状態になつた場合に起るものであつて、其の際或る少量の精液は尿道の抵抗によつて尿道内に遺留し、尿の排泄と共に體外に排出されるものである。故に今若し斯くの如き經過を射出と名づけるならば、又射出と名づける事が出来る。何となれば此の作用は所謂射出作用と同一であるからである。

次ぎに起る疑問は、兒童に於ける快美感覺である。快美感覺を明瞭に認識する事は甚だ困難である。殊に兒童に於て更に困難である吾人はたゞ次ぎの如く説明し得るに過ぎない。

第一兒童期に於ても發育した人間に見るが如き快美感覺に刺戟さるゝが如く見ゆ

る事は確かな事實である。乳兒及び幼兒が身體を揺り動かすのは自瀆的行爲の證據であつて、快感を感じつゝある現象であるといふ人があるが、吾人は此の説を信じない、何となればこれは普通愉快なる感情の表現であつて、性的快美感覺とは全然別物であるからだ。

兒童が濕んだ眼を大きく見開き、大人に見るが如き性的亢奮の有らゆる舉動を外部に表現する時は、彼の快美感覺を感じつゝある事を知り得る。併し大人が射出と共に感ずる如き快美感覺の極に達しないのは云ふまでもない。勿論場合によつて乳兒ですら其の極に達しないのは云ふまでもない。勿論場合によつて乳兒に達する事があるのは、多くの學者の認める處で、殊に七八才の兒童には稀でないといふ。

快美感覺の極は龜頭、陰核、小陰唇等外生殖器を刺戟して起る快感とは到底比較し得ないものである。併し年齢と共に此の快感も増加し、第二兒童期の終りには其

の極に達する事は稀でない。やがて其れが前に説明したモールの調節的筋肉運動と連結し、精液の分量が少い故に尿道外に滴出される事はないけれども、何れにしても或る分泌腺の精液を滴出するのであらう。併し、此の點は未だ充分確實でない。

併し、同一程度の快美感覺と、快美感覺の極に達し得る事は確實である。併しながら精液を體外に排出しないのであるから、大人が其の極に達した後満足感情を得て、性的亢奮が休止するものと同一の結果に達するものか、或ひは自瀆によつて過度の刺戟を加へた爲め苦痛を感ずるかは明白に斷言出来ない。これを要するに吾人は快美感覺の極と其れに連關して生ずる満足感情とは、勃起と同程度の快感を生殖器に感じてから後に初めて起るものである事を斷言しようとするものである。

併し、快美感覺と其の極期とは、大人と兒童とによつて著しい差異のあるものである。其の説明は後にする。要するに勃起は第二兒童期の終る餘程以前に起るもの

第四章 性慾生活の發達

であつて、第一兒童期の初め又は其れよりも以前に起る場合も少なくない。又、勃起は同程度の瘙痒感情に等しい快感を伴ふ事もある。併し快美感覺の極と射出とは後に至つて初めて起る現象であると斯ういふのである。

接觸作用の現象

今まで説明したのは外部生殖器であつて、主に收縮作用に就て述べたのであるが、以下性慾現象の第二類である接觸作用に就て説明する。

接觸作用も既に兒童時代に重大なる活動を爲すもので、大低收縮慾よりも前に現はれるものである。吾人は此の作用を説明するに先だち、マックス・デツツマーの性慾發達の三時期に就て説明する。(但しマックス・デツツマーの説明は接觸慾のみに就てゐる。)

マックス・デツツマーによると、性慾の發達を三期に區別する事が出来る。第一期は最も初期の兒童時代即ち中性期で此の時期には、心理的性慾作用は起らないから、接觸作用を観察する事は出来ない。

其の次ぎの時期がマックス・デツツマーの最も注意した必要な時期で無差別期といふ。無差別期とは其の名の示す如く、情慾の方向充分に差別的ならず、種々の方面に動搖し、面前にある外部の目的物によつて其の方向を變更するのである。従來此の時期の研究を怠つたが故に、性慾研究の全部の上に大なる障害を來たしたのであるが、此の時期の研究は性慾研究の基礎的意識を有する大切な時期なのである。

此の時期に於ける兒童に同性愛を生ずるのは極めて普通の状態で、或ひは友人を愛し或ひは教師を愛する等の事があるが、後には皆普通の状態に復するものである。非常に夫を愛する妻も、此の時期に限つて獨身の友人又は同性の女教師を愛し

た事がある。而も此の時期に於て男女共に異性に對しても愛情を起し得る。そして其の愛情が同性的なるにせよ、異性的であるにせよ、續いて肉體上の活動を誘發せしむる事多く、其の現象は外生殖器に現はれないで、接觸、抱擁、接吻等を行ふものである。

無差別期に次いで來る時期は所謂差別期で、普通の状態に性慾の方向が異性に向けられる時である。此の時期は性慾が減退して全然消滅するまで繼續されるのである。

モールは「吾人は無差別期が如何なる人間にも來たると思ふ可からず、併し、勿論世人の想像以上に此の現象多くして、後に至れば普通の性慾状態に復歸する事は疑ふべくもない」と云つてゐる。

無差別期には同性的感覺のみならず、又他の惡傾向を有する性的感情の現はれる事がある。狂崇狂、殘忍性色情性、被殘忍性色情狂等に類似した亢奮も種々の

状態に表はれ、動物に對する性慾などか現はれる場合がある。(これ等の病的性慾に就ては後章で別に説明する。)

其の他種々の混亂した觀念が聯關して起る場合もある。例へば愛するもの、唾液又は吐出物に觸れんとし、或ひはこれを食せんとする感情の如き、多く皆此の時期に起る現象であつて、而も大低成人後其の當時の事を記憶してゐないものである。

無産別期を重大な時期とするには尙一つの特別の理由がある。其れは從來小兒時代に惡癖的感情があると其れを生得的と見做してゐたけれども、無差別期の研究から推定すると、多く此の時期に一時的に現はれる處の性的感情である事が解る。故に此の時期を経過し、差別期の普通状態に這入れば、多く自然に消滅するものである。これ等の事を研究する上に於て、無差別期は最も重要な時期に屬するのである。

無差別期の始まる年齢は一定しない。モールは五歳にして此の時期の者を見た、

兩性の性慾及其差異

併しモールはこれよりも前に始まり得ると云つてゐる。一般には九歳乃至十歳で、七八歳ぐらゐで起る場合も少くない。勿論モールの云つた如く、如何なる人間にも悉く此の時期が來るといふ譯ではない。此の現象の現はれないものは、此の時期に於て既に差別的性慾の現はれるものである。何れにしても普通は九歳又は十歳、時に八歳ぐらゐから異性に對し愛情を生ずる事は確實である。

無差別期の經續時間も一定してゐない。或る場合には廿歳で終る事もあれば、其れよりも長く續く事もある。併し、大抵は十五歳乃至十七歳頃に差別期に入るものである。そして、大抵の場合同時に兒童時代の惡癖も消滅するものである。

無差別的性慾の好適例として、ゲーテの小説「ウイールヘルム・マイステル・ワンデルヤール」の一節を紹介する。同書第二卷第十二章のウキルヘルムが最も幼時の物語である。

年長の子供は漁夫の息子で、年は余と左程違はなかつたが、何故とは知らず、初

めて其の子供を見た時から、余の心は奪はれた。そして余は誘はるゝが儘に、少し離れた河へ行つた。

二人は木蔭に休んで、釣りを垂れ、互ひに凭れながら座つてゐた。彼れは釣りに倦きて、水中に突出した砂洲を指し示し、

「泳ぐのにいゝ時候だ」

と云ふが否や、直ちに其處に下り立ち、衣服を脱ぎ捨てた儘、水中に飛び入んだ。彼れは水泳の名手であつたから、直ちに浅い場處を捨て、水の深い余の前に泳いで來た。

周圍は非常に暑く、人は太陽よりも日蔭を慕ひ、日蔭よりも水に親しむ日であつた。余は子供に誘はれて、両親の心配を胸に浮べながら、直ちに砂洲に飛び下りて着物を脱ぎ捨て、其の儘水中に飛び込んだが、身丈の立つ處で立ち止まつた。彼れは再び其處らを泳ぎ廻つてゐたが、やがて日光の中に立つて身體を乾かし

た。余は其の時思ひもよらざる人體の美しさに驚かざるを得なかつた。彼れも又驚いて余の身體を見詰めた。二人は尙裸體の儘相對して立つた。二人の心は互ひ牽引を感じ、火の如き接吻の中に永久の友情を誓つた。

又、其の章の續きにウキルヘルムが其の少年と夕暮に森の隅で約束をした後、自分よりも幼い少女と密會する處がある。

彼の女は金髮の心優しい美人であつた。二人は手を曳き合つて歩みながら、何物をも望まざるが如く思はれた。——程經て其の頃の事を思へば羨望の念に堪へない。——余は思はず友情と愛情との予感に囚はれた。やがて心ならずも此の乙女と別れた時、余は此の心を若き友達に打ち明け、其の同情を得て新しき感情を樂しまうと思ひつゝ、我が心を慰めた。

業次ぎの例は無差別的性慾の實例をして、モールが或る人から供給されたものである。

目下卅四歳の男幸福なる。結婚の下に數名の健全なる子供を得た。彼れ自身も普通の性慾を有せる健全なる男子で、肉體上並びに精神上に異常はない。其の無差別的性慾期に就て次ぎの如く物語つた。

余は九歳の時或る田舎で家庭教師に就て教育を受けた。其の時其の家庭教師に對して感情が起つた。教師は親切な人であつたが、時には嚴格であつた。余は極力其の教師の側にある事に勉め、其の教師に手を握られると、非常に快感を覺えた。此の傾向は次第に増加して、彼れに抱かれる時彼れの身體から暖められるやうに感じた。彼れが杯で酒を飲んだ時、余は窃かにそこへ行つて彼れが唇を觸れた部分に自ら唇を觸れて樂しんだ。

斯くて余は十歳の時都會に出で、ギムナジウムに這入つた。其の時余は余と同じく田舎から出て來た生徒と席を並べる事になつた。余は直ちに其の生徒に或る感情を起し、常に共に勉強せん事を希ひ、他の生徒と並んでゐる處を見た時不快の念が

起つた。

入學後一年にして此の生徒は學校を去つた。余は其の時非常に不幸を感じたが、間もなく其の友人の姉で當時十二歳の乙女によつて心を慰めた。此の乙女と知つたのは、勿論其の友人と共に勉強したが爲めで、其の家庭で知り會ひになつたのである。

彼の女は美しかつた。余は時々其の家を訪れた。併し其の時の目的は他校に入學した友人の近状を聞かんが爲めで、時には其の友人と會遇する事もあらうかといふ、不確實な感情がりであつた。然るに次第に其少女に對する感情が高まつて行つて、日曜日に其の兩親から招かれるのを無上の樂しみとした。そして此の少女と同室する事は絶えず余の心を刺戟し、最初非常に不快に感じた少女の遊戯も好むやうになつた。

斯くの如くして十二歳に達した時、余は又學校の非常に嚴格な或る教師に對して

感情を起した。其の時の感情は曾て家庭教師に對して起したのと同様であつたが、家庭に於ける如く教師に密接する機會がなかつたので、家庭教師に對してしたやうな行ぬは斷行し得なかつた。

教師と少女とに對する感情は同様に保續されたが、恰も其の時前の友人が休暇で歸省した。併し余も又同様に歸省したので、長く彼れを見る事が出来なかつたが、彼れに對する感情は既に變化してゐた。余は又歸省中余の家庭を時々訪問する年長の従姉に對して感情を起した。

斯くて余は次第に成長して春機發動期に達したが、爾來友人の姉を想ふか、或ひは何等性慾的の意味無くとも姉が余に觸るゝ事があると、直ちに勃起を感じた。此の時も尙教師に對して一種の感情があつて時々勃起を感じた。次いで余は自瀆を行ふやうになつた。併しこれは決して友人の誘惑ではなかつた。勿論其の談話が生徒間に行はれた事はあつた。

此の時尙姉と教師とに對する感情は残つてゐたが、次いで又女性の如き外觀を有せる同級生に感情を起した。併し精液を射出するやうになると、男性に對する感情は次第に消え、十六歳にして町を去る時は全く婦人に對する感情のみ起るやうになつた。

次ぎは卅歳の男である。病的の部分は更に無い。

余は性慾的と稱すべき感情は、田舎で初めて経験したやうに記憶してゐる。余は元來町に住んでゐたのであるが、休暇に田舎へ行つて、牧師の家を間借した。余は日々遊び廻つて特に動物を愛した。山羊犬馬と順次に牽きつけられて行く有様は、自分乍ら殆ど理解し得なかつた。

余は其の時生殖器に何の感覺も感じなかつたがやはり一種の性慾であつたやうに思ふ。余は動物を捉へたのみならず、これを抱き、これに接吻した。そして動物の温度及び一種の動物臭を嗅ぐ事を一つの愉快とした。田舎を去るに及んで此の感情

は次第に消滅した。續いて余は一人の學友に感情を起した。そして其れは可成長く續いた。余が其の學友に對して起した感情はたゞ無限の感情的戀愛といふより他に云ひ表はすべき言葉が無い。成績の都合上余が彼れの後に座する時は非常に不幸を感じたが、左右に並ぶ時は再び彼れが余の前に來らざらんが爲めに、知りながら質問に答へなかつた事がある。此の關係は數年續いたが、やがて春機發動期に達するに至つて、余の傾向は次第に變じて、遂に舞踏を學べる一人の少女を愛するに至つた。

少女は其の時十四歳で、余の感情は尙兩者の間を動搖しつゝあつたと云へる。此の男性と女性とに對する感情の動搖は、其の翌年になつて次第に反比例に進み、女性に對する感情は次第に強まつて行つたが、此の少女に對する感情は又或る他の女性に對する感情の爲めに、此の興味界から押し出された。そして同性的傾向は全く消滅した。尤も其の後二十歳に達するまで女性の如き外觀を有せる男子には多少興

味を感じないでは無かつたが、其れも次第に消え失せ、完全なる兩性愛に這入つた。

次ぎは廿六歳の婦人である。此の婦人は八歳より十五歳まで小學校に通ひ、二三科目獨習した上學校の寄宿舎に這入つた。

最初のうちは學友に對して純潔なる友情を感じたのみで、互ひに接吻した事はあ
るが、其れ以上の親しい接觸はしなかつた。私は其の當時接吻に友情以上の感情を
感じた事もなく、何等戀愛の意味をも感なじかつた。斯うした状態は私が十歳の時
當時住んでゐた或る中都會へ美人の女優が來た事によつて遂に破壊さるゝに至つた
此の女優の寫眞は至る處の店頭に掲げられて、其の都會の評判となつたが、左程妙
技も無かつたので其の評判も直ちに消滅した。然し私は絶えず其の女優を慕つた。
然るに此の女優が去つてから、大なる金毛の髯を有する如何にも男らしい男教師
が其れに變つた。此の教師は生徒全部の憧憬の中心となつてゐたが、私は學校を卒

業するまで其の状態を繼續した。其の後多少年齢が長じ、寄宿舎に這入つてから、
ゲーテの「ファウスト」劇を見物したが、其の時のグレートフェレに扮した女優に
深い印象を與へられた。私は其の女優に紹介されて、スケツケブックに二行の實筆
を乞ひ得て無上の幸福を感じ、爾來寄宿の監督が觀劇を許してくれりと、全身に戰
慄を覺える程嬉しかつた。

此の状態は寄宿してゐる間繼續したが、結婚年齢に達して私を愛せる或る紳士に
求められ、兩親の同志を得て結婚した後、女優に對する感情は次第に消滅した。
私は今も尙其の女優に對して多大の敬意と感謝の情を有するけれども、戀愛的の
感情は全然其の跡を止めない、私は左程劇しくはないが、兎に角我が夫を愛してゐ
るそして、夫との性交は全く普通の状態であるにも關はらず、彼の女優其の他の婦
人とは接觸を欲しながら、性慾的思想の次陷せる爲め遂に其れを實行し得なかつた
のであらうか。――

以上、讀者は大體無差別期の性慾状態について知らるゝ處があつたらう。更らに進んで兒童性慾の一般的現象を説明しよう。

ザンフオールドベルは十歳にして既に心理性慾的現象の存在する多くの例を示してゐる。併し彼れは愛着感情の性慾的根底を充分に證明する多くの實例を示し得なかつた。併しながら兒童が成長するに従ひ性慾現象が次第に多く表はれる事は確かなる事實である。

兒童に於ては性慾的現象の境界が他の場合に於けるよりも不明瞭であるが、吾人の觀察する處によると、八才に達すれば接觸的現象は當だに病理的ならざるのみならず、異常的と稱し得ざる程常に屢々來るものである。そして漸次成長するに従ひ、接觸的現象と共に收縮作用の現象が混合して表はれて來るのである。

併し、接觸作用は少年期の最初の第一年に於て起る事がある。其の際生殖器に何等の自營作用の無い事は云ふまでもない吾人は大抵の場合性慾的接觸より遠く離れ

た初期の戀愛の實例を見聞した事が多い。

愛着の目的は一樣でない。大抵は男兒が同年輩の女兒に誘引されるもので、時には著しく年長の婦人に惹き附けられる場合もある。又、學校教師、家庭教師などに誘引を感じる例も少くない。

女兒も又同様で、寄宿舎などで見る如く、同年輩の同性に愛着するものが多い。

所謂「須磨の浦」などが此の例である。(一説に「須磨の浦」とは同性愛の意味ではなく讀んで字の如く自瀆的行爲の事だといふが、吾人が或る女學生に訊した處では矢張り同性愛の意味ださうである) 又兄或ひは弟の友人か其の目的となる場合もある。教師若しくは女教師等非常に年長者である事も尠くない。女優、音楽家、畫家、文藝家の如く藝術上に聲名を馳せる男女が目的物となる場合もある。大抵の場合容貌が重要な意味を有するものであるが、女兒によつては全然外貌とは無關係の場合もある。

然し、大抵は容貌が重要な役目をなすもので、美人美男子を好むのは兩性共に同様である。又兒童にして兩親に愛着する者も絶對にないとは云へない。男兒にして母の寢所に入るを好み、女兒にして父の寢所に入るを好むのは既に一種の性的感情を有するのである。斯くの如き性的傾向と子供の愛とも云ふべき交感的感情とに就ては後で述べる。

兄弟姉妹の間に於て最初の性的傾向を示した例の少いのは著しい異現狀である。モールは多少同性愛的及び同性愛的性質を有する實例を見たと言つてゐる。此の際勿論何等性的傾向を有せずして、だゞ淫猥なる言語又は行爲或ひは單なる好奇心より多少其れに供した現象を呈する場合があつても、其れとこれとを混同してはならない。

斯くの如き場合には性的交感性を欠いてゐるものであつて、従つて全然心理的要素を認むるを得ない。又、兒童の時より人間に植えつけられた因襲的要素が大なる權威を示し、血族淫を避けんとする傾向を明白に表現するものである。

互ひに愛するものは愛着の目的物を小説的に彩色せんとするものであつて、著しい想像力を要するものであるから、此の際想像を自由にめぐらし得るだけの年齢を要する事は云ふまでもない。兒童がお伽噺を好む事は此の時の材料を提供する爲めに甚だ必要な事である。此の小説的傾向は又年齢の長ずるに従ひ發達し、嘗だに兒童時代のみならず、少年時代に達しても發達を連續するものである。

兒童の愛する女は可なり位置の高い女でなければならぬ、男兒は無差別的性慾の時代にも階級の高い男性を好むものであるが、此の現象は又女兒に於ても同様である。即ち種々の想像を附加し、自分の愛する男子を高尙にせんとするものである。故に戀愛は大抵望みを達し得べき物を目的物とはしない。従つて其れが性的戀愛であるか、將た又他の感情的刺戟によるものか、明瞭に理解する事が出来ない。

兒童か戀愛に陥ると大人の如く嘘言を吐き、愛する女性の欠點は却つて美點となり、可なり女性の欠點を許さんとするものである。若し嘘言者の女と愛し合ふ時は性慾的原因を知らないが故に、女兒の有する種々の特徴を擧げて其の短所を補はんとし、嘘言は伶俐とし、虚榮は清楚とし、其の欠點は悉く美點となつて眼に映じ多くは斯くして其の女兒に對する心情を反情と思惟するに至るものである。又或る時は性慾的傾向が教教的動機となり。互ひに愛する者の惡癖を矯正せんとする。此の現象は又同性愛の場合に於ても現はれるものである。

兒童の愛着は種々の状態で外面に現はれる。戀人を見んとし、或ひは其れと同座せんとし、それに觸れんとし、或ひはそれに接吻せんとする。兒童はこれ等の機會を捕へんが爲めに女兒の遊戯に加入せんとする。

八才の娘を有せる母親の觀察によると、その娘は遊戯の際に二歳上の男兒と抱擁して、或る程度まで熱心に接吻し、男子は其の時愛情を疾素に顔面に表はして、

「僕はお前を何れ程愛してゐるかお前は知るまい。僕はお前をひどく愛してゐるのだ」と云つたといふ。

又、兒童は大人に對して斯くの如き行爲を強ふる事がある。一人前の婦人が八九歳の男兒に絶えず身體を押しつけられてゐながら、その行爲に性的意義の潜んでゐるのを少しも氣附かずにゐる事は、吾人の時々目睹する處である。

接觸は兒童の愛の前提であるが、又他の形に表はれる場合がある。例へば戀人を見る事、戀人の寫眞を見る事等が即ち其の例である。彼の格闘（取組合）の如きも其の一例で、兒童と兒童とが接觸せんとする一種の性的欲求に外ならない。ベルの説によると、此の格闘が男兒と女兒との間に行はれるのは密接なる接觸を達するが爲めで、互ひに一方を差し上げるのは即ち此の目的を達せんが爲めである。又女兒が愛せらるゝ男兒に打ち勝たるゝ事を欲するものも一つの性的現象であり、同時に又殘忍性色情をも含んでゐるのであると云つてゐる。

兒童の戀愛は劇しくなるに従つて、その舉動が次第に狂的となるものである。何事も戀人の眞似をしようとし、或ひは戀人の衣服を眞似、或ひは歩み振りを眞似る等見るに堪へない舉動をするものである。

戀人と同座すると兒童の気分は一變して、一舉一動何となく調子づき、戀人が去らんとすると非常に悲しげな表情をするものである。又種々の偶像的崇拜も兒童時代に存在するもので、戀人の所有物に接吻して喜び、戀人の手に觸れたものを神聖視する等の事は屢々吾人の見る處である。

嫉妬の感情の存在する事も同様である。兒童はその愛する兒童が他人と遊ぶ時は甚だしく嫉妬するものである。自分の愛してゐる女教師が他の女生徒に優しくした爲め、終夜睡らないで小さい胸を痛めるなどは屢々吾人の見聞する處である。全體から見ると、年長者に對する嫉妬は同年輩の兒童に對する嫉妬よりも大きいやうである。

艶書も兒童時代に既に相當の役目をするものである。併しその内容は大抵不調和で性的特徴を想像する事が出来ない。談話する時は左程滑稽でもないのに、艶書を書くと言語不統一で甚しく滑稽に陥るものが多い。

戀愛の附帶現象即ち戀愛の目的物に氣に入られようとし、喜ばせようとする事は肉體的行爲にとると、精神的意志によるとを問はず、既に其の第一歩に於て現はれるものである。或る教師に戀した生徒があつたが、其の時程教師に柔順な時は無かつたといふ。モールの示した例に、ある一人の女兒が入學當時は怠惰で學業が常に進歩しなかつたが、或る女教師を愛するに至つて、俄かに勉強を始め頓みに成績が上つたといふ。これは女教師が他の生徒を愛するであらう嫉妬と、その女教師を喜ばせその心を奪はうとした爲めである。

兒童の舉動で理解し難い事は、此の方面から考へると容易に理解する事が出来る。男兒が女兒に氣に入られようとする時は、體操とか角力とか競走とか凡て體力上

の印象を與へんとし、女兒は裝飾とか化粧とか嬌羞とかによつて男兒に氣に入らるようとする。

兒童が早く大人たらん事を希ひ、小供たる事を耻づる時には虚榮心が著るしく發達するものである。戀の目的たる年長の女性に子供扱ひにせられると、著しく自尊心を害し、自棄な氣持になるものである。ゲーテは十五歳にして斯くの如き經驗をしてゐる。

彼れデロネスは余等より二三歳年上の姉に紹介した。其の姉は愉快なる乙女で、身體は規律的に發達し、顔は赤く、髪は黒く、そして眼の涼しい美人であつた。全體の様子は幾分打ち沈んで悲し氣であつた。

余は全力を擧げて其の機嫌をとらうとしたが、遂に其の注意を向けしめ得なかつた。若き乙女は自分より年下の男よりも凡てが進んでゐるが故に、斯うして最初の愛着を向けた男に、まるで伯母の様な態度を示した。

羞耻の感情も既に兒童時代に現はれるものである。エリスも其の他の性慾學者も皆これを承認してゐる。併し世人は往々羞耻と臆病とを混同してゐる。人さへ見れば顔を赤くして逃げ出すが如きは多く臆病であつて羞耻ではない。併し、此の間の差別は非常に困難である。

何れにしても、羞耻心は模倣と教育とによつて、兒童時代からこれを有する事は争はれぬ事實である。少くとも第二兒童期に達した男兒及び女兒が、他人殊に異性の前で顔を赫むる事は何人も認める處である。別して同性愛に陥れる兒童が、同性の面前では顔を赫めながら、異性の面前では平然としてゐるなどは面白い現象である。

ペルは羞耻心は女兒の方が早く發生するが、兒童としては男兒よりも侵略的であると云つてゐる。兒童時代の兩性の間に然うした區別があらうとは心附なかつたが唯だ第二兒童期の終りに於て、男兒が寧ろ女兒よりも受動的である場合は確かにあ

兩性の性慾及其差異

る。勿論女兒が戀愛に陥つた時は發育した女性よりも遙かに大膽である。併し、兩性の典型的區別は大抵後に至つて生ずるもので、女兒に羞耻感情が多少欠陥してゐると云つても、其れは成人した女性と比較しての事で、男兒と比較して云ひ得ることではないのである。

ベルは又或る年齢即ち八歳より十二歳に至るまでは、戀愛の表現が其の前後より少いと云つてゐる。これは兒童は此の時代に特に自己の愛着心を戀人のみならず、他人の前に隠さうとするが故に、其の現象を觀察する事が困難なのである。故に區別は唯だ秘密にするといふだけの事である。

又、男兒が女兒よりも二三年發達の遅れる時期がある。此の時代には特に亂暴な惡戯を好むものであるが、これは自然が性的嫌惡の情を起さしめて、性慾發生の際に一時危険を防止せんとする一定の目的から生じた現象である。併し此の結果は男兒は女兒を嫌ふ爲め、異性愛の代りに無差別的性慾のみ自然的傾向が現れ易いもの

であるから吾人は此の自然の調節を餘り過重してはならないのである。

愛着の方法は兒童に於ては全く不定で、或ひは小説的となり、或ひは肉的となるものである。従つて愛着の目的物も絶えず變更され、或ひは父の友人を愛し、或ひは兄弟の友人を愛し、或ひは名聲高き社會人を愛する。

一般に無差別期に達しない時、自身の成長と共に次第に年長に年長者を愛する事は何人も認むる處である。モールはこれに就て、兒童時代を包含する比較的少い年限には勿論數學的に確定し得られないが、多くの兩性の兒童に質問して此の證據——年長者を愛する傾向——のを得たと云つてゐる。

兒童時代に始まつた愛着が次第に發達して、遂に結婚まで達する事は多くある例である。大都市に於ては斯くの如き現象は少いが、小都市殊に地方には其れが多い今假りに二人の男女兒童が共に成長したとする。彼れ等の性慾的感覺の自覺に就ては未だ何人も認めないのに、既に兩者は互ひに相愛する仲となつて、其の後彼れ等

兩性の性慾及其差異

に性慾的自覺が生じたならば何時しか性交を結ぶに至るであらう。都會に於ては眞淫婦が流行するが故に性慾に熟した少年は此の方面に走るのと、今一つは人目の多いといふ周囲の關係から性交を結ぶ事は比較的少ないが、地方に於ては斯うした機關が少く且つ周囲が性交を結ぶに都合のいゝ爲めに、自然結婚前の性交が結ばれ、從つて結婚關係を生ずる事が多いのである。

大體に於て兒童の愛着は餘り連續しないのを常とする。たとひ其の初めに精神上の苦痛を被ふ事があつても、比較的早く此の苦痛に打ち克つて分離するものである。戀人が死んだ時も同様で、左程悲哀を感じないものである。大抵は愛情も比較的早く消滅し、死或ひは其の他の理由によつて別離する事があつても、存外平氣で、新しい愛着が古い愛着に代つて直ちに其の後を襲ふものである。併し勿論或る場合には愛人の死或ひは別離の爲めに、自殺又は精神上の疾病を誘發する事も無いではない。

兩作用連結の現象

今までは收縮作用と接觸作用とを互ひに分離して説明した。併し此の兩作用が互ひに連結して居る場合も少くない。或る時には一方の作用のみあつて一方の作用が欠陥し、或る時は兩作用が完全に連結して働く事があるのである。收縮現象のみ起る、或ひは接觸現象のみ起る場合は前者の例で、後者の例には次ぎのやうな實例がある。

これは三歳の頃殆ど同年の娘(甥の娘)と遊んだ人の事である。二人は仲よく夫婦遊びをして楽しんだ、彼れは絶えず其の事を考へてゐたが、夜身を床上に横たへる時勃起を起して必ず快感を伴つた。彼れは睡りながら、或る人間が彼れの床に横はつて彼れに觸るゝが如き夢を見た。其の夢には又彼の遊戯仲間も現はれた。彼れは

兩性の性慾及其差異

度々此の夢を繰り返したが、彼れの頭腦は更らに劇しく此の女兒の事を考へるやうになつた。後に至つて遂に愛着となり、十七歳にして女兒に其の心を打ち開け、互ひに婚約を結んだが、男は精神病に罹つた。

次ぎは收縮作用が接觸慾の目的物と連結せずして、兩作用の成立する場合である。即ち兒童が既に生殖器に性慾感覺を感じて、自瀆的遂情を行ひながら、其の愛する女を考へる事も、同席する事も、抱擁する事も欲求しない場合である。

接觸慾が收縮現象を發生せしむる程に此の兩作用が密接の關係を有するとせば互ひに愛着の感が交換せられる時は、兩者の間に性慾的行爲の生ずるは甚だ容易な事である。兒童の性慾行爲は大抵斯くの如くして成立するものであつて、大抵同衾して陰莖を勃起せしめ得るも射精しない事は多くの實例の示す處である。モールは次ぎのやうな例を示してゐる。

二十一歳の男、健全なる、少くとも左程墮落せざる家庭に育つた。五六歳の頃第

一の性慾感覺を知つた。彼れの目的者は女中で、常に彼れを愛し、彼れの生殖器を自身の身體に押し當てたのに歸因する。其の後九才にして彼れは同年の少女を愛し性慾的行爲を行つた。其の時既に勃起して快美感覺を感じたが射精はしなかつた。

彼れは長く斯くの如き關係を續けたが、宗教を信するに至つて其の不正を知り、斷然關係を絶つて遂に十九歳まで眞面目な生活を續けた。其の間同衾は勿論自瀆も行はなかつたが、十九歳に至つて欲求に打ち克つを得ず、自瀆を始めて今日に至つた。其の度數は大抵毎週二三回又は四回で、三ヶ月休止した事が一度あつたのみで他は絶えずこれを繼續した。

彼れは賣淫者を嫌ひ、精神的に發達した女を好み、接吻又は抱擁を欲する事は可成劇しかつたが、同衾慾は無かつた。自瀆は常に物理的で目的者を想像する事は無かつた。

同衾慾に於て觀察せらるゝが如き、收縮作用と接觸作用との完全なる連結は後に

第四章 性慾生活の發達

至つて初めて現はるゝ場合が多い。斯くの如き事は、接觸慾に存在せる肉慾的要素が明かに以前より認めらるゝ場合に限るものである。

接觸慾は兒童が純精神的戀愛を女子に對して感ずる場合のみならず、寧ろ女子に對して、肉體性的特徴に刺戟さるゝ場合に成立するものである。故に斯くの如き男兒が女子の肌を見る時は激しい刺戟を感ずるものであつて、又男兒が女兒と自己の生殖器との關係を知らないのに、女兒の生殖器を見て刺戟さるゝが如き例は甚だ少くない。これを反對に女兒が男兒の生殖器によつて刺戟される例も少くない。

斯くの如き場合には、次第に收縮作用と接觸作用とが完全に融合するものであつて、男兒が其の愛する婦人に身體を押し附けて、勃起のみならず射精を起して自ら驚愕する場合が少くない、此の際慾望の起る事は大人よりも甚だしく不定で、大抵は想像によつて不確かなる心像を描き、其れに對する憧憬の感情から同衾に於ける性交慾が發達するのである。

吾人は上記の兩作用が、兒童に於ては少くとも自覺的的感情として現はるゝ事を述べたが、大抵の場合には接觸作用が先づ自覺される事が多い。八十六人の普通の異性愛をした男を研究して見たのに、其の中の百分の七十五以上は先づ接觸感情を有し次いで、生殖器に自覺作用を生じたものであつた。これ實に收縮作用を本來的なりとする従來の説を根底から破壊するものである。

下等生物の繁殖は分裂又は發芽によつて行はれるものであつて、其の際必ずしも第二の個體を要さない。此の發芽は即ち男子の收縮作用射出に相當するものである。併しながら大抵の場合收縮作用が第二の自覺に上るにも、個人の發達に於ては此の作用が第二に發達するものと云ふを得ない。

接觸慾先づ覺醒して、收縮作用が次いで起る模範的の例として、左に一つの實例を擧げる。

三十二歳の男、其の體質は神經衰弱症に罹り易いが、他に病的現象は無い。

兩性の性慾及其差異

余は七歳にして男女混合で教育する私立小學校へ這入つた。従つて遊戯の際も男女共に混合して遊んだので、余は直ちに一女兒と親しくなつて、常に勉強をも共にした。斯くて余は九歳に達して男生徒のみの學校に入學したが、其の女兒との交際は依然繼續した。余の兩親も其の女兒を愛し、共に海水浴などに伴なうやうになつた。

余は何故に此の女兒を愛したか、其の理由を知らない。大方其の明るい碧眼、儂らざる性質、豊かなる金髪等によるのであつたらうか、余は確かに然りと答へる事が出来ない。併し此の女兒は他の男兒からも熱望されてゐた事は事實である。彼の女はこれ等の男兒とも遊ぶ事を好んだが、彼の女と彼の女の兩親とは其れ等の男兒より遙かに余を愛した事も事實である。余等二人は決して不利に陥る事なく、寢就く時も余は必ず彼の女の幸福を祈つた。

斯くて二人の愛着は互ひに交換せられ、二人は將來の結婚を物語つて楽しんだ。

又或る時は結婚式を如何に行ふべきかなどと色々考へて楽しんだ事もある。余は他の人には秘密にした事までも彼の女には隠した事なく、遊戯中彼の女を見失つて非常に腹立たしく思つた事もあつた。これを要するに余はこれ程女性を愛した事は前後に一度も無かつたのである。

併し男子ばかりの學校へ這入つてからは、屢ば逢ふ事が出来なくなつたので、此の女兒を思ふ事も次第に少なくなつた。さりとして他の女兒や男兒を愛した事も無かつた。其の後夢に男兒を思ふ事があつても性慾的色彩を帯びた事は無かつた。余は唯だ交感的男兒を心像に描いたのみで、生殖器の昂奮及は情慾的現象の起つた事は一度も無かつた。

十四歳に達した時、余の兩親は余と此の女兒とを伴なつて海水浴に行つた。其の時余は又海濱で此の女兒と遊ぶ事を好んだ。勿論其の以前既に相抱擁した事もあり最も親密なる感情に囚はれた時は接吻した事もあつた。然るに今二人が互ひに砂上

に輪になつて遊びながら抱擁したのに明かに勃起を覺えた。其の時非常に愉快ではあつたが快美感覺又は満足感情は欠けてゐたやうに思ふ。併し爾來余は彼の女と抱擁せんとする希望が次第に増加し、其れを思ふ情も益々慕つて來たが、離れる時を怖れて想像する事すらも避けようとした。其の時又結婚に就て物語つた事は云ふまでもない。やがて二人は兩親と共に町に歸り、其の冬は又前の冬の如く時々相會した事はあつたが、接觸する事は非常に困難になつた。余は度々彼の女の事を思ひ、或る夜彼の女と遊んだ海濱の事を夢みて、初めて射精を行つた。

彼の女に對する余の愛着は其の時尙残つてゐたが、學校を卒業して寄宿舎に這入るに及び、其の感情は次第に冷却した。併し、別れに際して非常に不幸と寂寞とを覺えた。余の兩親は其の頃男性と遊ぶ事を余に強ひた。余は其れに従ふのが非常に苦痛であつた。やがて彼の女は余の腦中より去り、余は遂に大學に這入つたが、其の入學前に自瀆的遂情を始めた。大學入學後は或る時期を置いて女性と交り、性的

關係は全く普通の状態に發達した。

性慾生活が教育法の異らざる限りは、男兒と女兒との間に著しい差異の存在しない事は大略上述の通りである。併し十分に發育した女子は屢々認めらるゝ性慾脱出即ち快美感覺の欠陥及び同衾中性慾を起さざるが如き状態が、既に兒童時代に於て認めらるゝ事は争ふ可らざる事實である。

又、性慾の外的作用は男兒よりも女兒の方が著しく退歩してゐるものであつて、女兒は男兒を愛して抱擁又は接觸を好みながら、男兒が女兒を愛する場合の如く、容易に情交的行爲を斷行し得ないものである。女兒同志の間に於ても同様で、男兒同志の如く性交類似の行爲に出づるを得ない。故に女兒の同性愛は男兒の同性愛よりも遙かにプラトニラク・ラブであると云ふ事が出来る。

自瀆及び射精

兩性の性慾及其差異

自瀆とは所謂マスターベーションである。オナニーとは舊約聖書にあるユダのネイスラエルの譯にしてオナニーと云へる者より來れりと云ふ。

吾人は假りに自瀆を收縮慾の表現であると云つたが、收縮慾の既に存在してゐる時は更らに屢ば自瀆を行ふものであつて、何等の想像的觀念なしに純粹の有機的活動として起る場合もあれば、又想像的觀念が重大な役目をなす場合もある。そして其の状況は兒童に於ても又發育した人間に於ても同様である。

想像的觀念が存在すれば接觸慾の目的に適合するものである。例へば男兒ならば女兒を想像し、無差別性慾の場合ならば男兒を想像するの類で、而も大抵は年長者に限るものである。

最初のうちは想像的觀念が缺乏してゐても、大抵は漸時に生ずるのを常とする。尙又兒童時代には少年時代よりも想像的觀念の無い自瀆が比較的多く現はれるものであつて、收縮慾の外的作用及び接觸慾の中心作用が未だ左程密接に融合しないも

のである。

大抵の場合、收縮慾の前起る接觸慾が既に覺醒せる時にも、收縮慾の起るに際し、兒童が想像的觀念無しに自瀆的満足を得る場合は比較的多い。かゝる時には生殖器の人工的刺戟は異性の接觸慾及び抱擁に對する願望とは獨立して起るものである。

吾人は既に發育せる人間の快美感覺が、心理性慾的感情と密接の關係を有する事即ち接觸慾に關連する事及び接觸慾に適合する活動の行はるゝ時にのみ完全なる快美感覺の生ずる事を述べた。併しながら此の兩作用の連結せざる時にも快美感覺は存在し得るものであつて、これは兒童が發育せる人間よりも接觸作用に無關係で、外的快感及び満足感情に達するを見ても理解を得らるゝ事である。

併しながら、此の兩作用は兒童時代に於ても次第に連結するものである。此の場合には快美感覺及び主觀的安心は其れに適合せる動作と觀念とによつて解決される

兩性の性慾及其差異

ものである。これを要するに兒童時代は發育した人間の場合よりも快美感覺並びに満足感情が接觸作用より獨立して表はれ易いのである。

射精は自瀆の際に絶對的必要ではない。大人に於ては最後に大低射精するものであるが。兒童に於ては必ずしも然うではないのである。併し第二兒童期の終りには大低射精作用の表はれる事は事實の證明する處である。

生殖器の刺戟法は種々あるやうであるが、大低は手指によるものらしく、可成人目を避けて行はんとするものである。男女に於ける自瀆度數の比較は從來屢ば學者によつて試みられた處であるが、先づ女性よりも男性の方が多いとされてゐる。

モールは此の説を承説して、普通の性慾を有しながら、自瀆的遂情を行はなかつた男は極めて少數であると云つてゐる。これに反して女性の自瀆的遂情に關しては諸説紛々として容易に決定しない。モールが各方面に質問を發して得た結論は左の通りである。

女兒の自瀆は男兒程盛んでない。併し成人後性慾の猛烈な女性は少女時代に自瀆的遂情を行はなかつたものである。又、自瀆を行ふ女性は其の度數甚だ多く、二度若しくは三度連續的に行ふ事は遠く男性の及ばざる處である。

グットサインの意見もモールの説と一致してゐる。たゞグットサインは十八歳乃至二十歳にして性交を有せざる女性は悉く自瀆を行ふと斷言してゐる。併しこれは觀察を過まつてゐる。十分發育した二十歳以上の女性にして男性との性交もなく、自瀆をも行はない眞の處女は幾等もある。これは女性に性慾脱出のある事を見ても理解される事である。

吾人はこれから一つ不明な點に研究を進めなければならぬ。其れは兒童が心配の感情に囚はれた時に性慾的昂奮を起す事である。斯くの如き時兒童は射精を起し或ひは勃起せずして多少の快感を起すのである。左に其の例を示す。

或る生徒は臨時課題を出されて時間が切迫して來たのに未だ答案が出来なくて、

兩性の性慾及其差異

弱い快感と共に性慾的射精を起した事を自白してゐる。又或る生徒は卒業試験に同様の場合に遭遇して射精したといひ、又或る生徒はやはり試験場でカンニングを發見された爲め、放校を畏れて射精したといふ。

思ふにこれ等は皆心配感情の爲めに或る苦痛を感ずる結果被殘忍性色情に類化した性慾を生じたものではあるまいか。

モールの説にあれば、斯くの如きは大抵男子で、而も極めて少數の男兒に一度か二度あつたに過ぎないさうである。女兒には僅かに二例に遭遇したのみで、十三歳と十四歳との女兒であつた。其の中の一人は其の現象後も尙續いで、性慾的に十分發達した後も、少し恐怖的感情に捉はれると直ちに射精したといふ。

左に最も好適例を示す。二十歳の大學生である。

私は十六歳にして初めて性的感情を知つた。私はより以前から、友人に生殖や自瀆や其の他の事を教へられてゐたが、一二回自瀆的行爲を試みたのみで、決して

性的行爲を行はなかつた。然るに第二上級に進んで及落を決する算術の試験を受け、た時、容易に答案が出来なかつた爲め非常に煩悶焦慮し、辛ふじて漸く其の半ばに達した時教師が残り僅かに十分間なる事を告げた。私は其の刹那非常なる恐怖的感情に襲はれて、初めて精液を射出した。私は其の時の状態を十分に説明する事が出来ない。唯だ快感を感じたのみで勃起したとは思はなかつた。

其の後第一級生となつた時、また同様の場合に二三度射精したが、爾來普通の性慾状態に發達した。其の他婦人に接觸したと思つた時、夜遺精をした。又一度夢で狂犬に逐はれ逃走せんとした時、急に跛足になつて一步も前進出来ず、非常な恐怖に襲はれて射精した事があつた。

性的既熟の男女が性交も自瀆も行はない時は、睡眠中時々遺精をするものである。其の時男性は精子を射出し、女性は無力腺分泌物を射出する。遺精は大抵快感を伴はないのみならず、性慾感情に相當する生理的過程をも伴はないものである。

普通異性の抱擁を感じ同性愛の者も同性の抱擁を感じるものである。

夢精は遺精と異り本來的活動の準備たる接吻、接觸、抱擁等を夢み、性交にまで達せざるうちに射精するものである。然し其の他の點は覺醒時の生理的現象と異なる處はない。

兒童にも此の現象は存在し、未だ自瀆の發生しない時期に既に起るものである。

殊に女兒に其の數が多い、心理性慾的作用は勿論兩性とも性慾的の夢の起らない時に成立するものであつて、男兒は未だ女性の抱擁を夢みざるうちに女性には惹きつけられるものである。

併し、明かに夢が心理性慾的生活を覺醒せしむる場合は別として、大抵は遺精の如き深き印象を遺す現象の起らない時には、夢は大抵忘却されるものである。故に吾人が心理性慾的生活が先づ目覺むると信じつゝある場合に夢みた事が、既に其の前にあつたのを忘れる場合が少くないのである。故に變態性慾は大抵先づ夢の中に

行はれるものと云ふことが出来る。そして、兒童が早熟なれば早熟なだけ性的の夢に襲はれるものであつて、従つて夜の遺精も早くから行はれるものである。モールは余の知れる範圍にても十歳又は十一歳にして性的の夢に襲はれたものは少くない。然し七八歳にして襲はれたものは極めて少數であつたと云つてゐる。

兒童にも覺醒時に性的刺戟を受けたものが夢に現はれる事が多い。然し成人した者に比較すれば想像が遙かに多く混じてゐるものである。又覺醒時には何等性慾的ならざる觀念が射精を誘發することがある。そしてお伽噺で知つた盜賊や悪魔の話し、囚はれ女王の話し、王子の話し等が夢の心思性慾作用の中に混入する場合が多い。斯くの如き現象が性慾の發達と共に消滅するものである事を知らない人は直ちに病的だと思ふであらう。又前に説明した恐快感情が、夢の中に遺精を起させる事がある。強盜、野獸等に襲はれる夢を見て遺精を起すのである。前に示した大學生の例が其れである。或る場合には遺精を起す場合の兒童の夢が甚だ不確實で、大人

に於けるが如く覺醒時の心理性慾的感情と何等明白なる關聯の無い事がある。

有名な佛國の革命婦人マダム・ローランドは、其の日記に初めて經驗した夜の遺精の事を記述してゐる。夫人は革命の際囚獄の身となつてゐたが、彼の女は曾て祖母から性慾に關する一部の説明を聞いた後初めて月經が來潮した。然し夜の夢で性的昂奮を感じた事は其の以前にあつた。

其の前私は突然深い眠りから醒めたことは屢々であつたが、想像力は少しも加はらなかつた。私は成る可く想像力を眞面目なものに集中し、又私の臆病にされた良心も絶えず其の方面に注意した。然るに其の集まつた心を掻き亂さんとする一種の衝動が、突然私を襲つた。

私は元より其の原因を知らなかつた。先づ第一に起つたのは何故とも知れぬ一種の恐怖であつた。私は正しい結婚より以外に快樂を求む可らざる事を以前から知つてゐた。妾の感じたものは一種の快樂なので、私は其の罪の深きを知り、羞しさと

悲しさとの極に達した。私は俄かに祈りを捧げて、二度と再び斯くの如き事の起らざらん事を神に願つた。

然し、私の不安は靜まらないで、身の終りが近づいたかの如く悲しんだ。私は自ら其れを防ぎ得ない時は、直ちに寢臺から飛び下りて、寒い冬の夜を氷つた床に跣足で降り立ち、サタンの神から救はれん事を神に祈り、次ぎに減食して防がうとした事を記述してゐる。

春機發動期

以上、吾人は兒童の性慾作用中最も重要なる部分を説明し得たと信ずる。これによつて兒童の性慾作用が一般に信せられつゝあるよりも、更らに多くの準備を有せる事が理解されたであらう。

今これを綜合して云へば、兒童の性慾は一方の作用が起る事もあれば、他の作用が起る事もある。更らに又一方が他方より優越せる事もある。これを例ふれば、女児が生殖器に自覺的感覚を感せずして、男児に性慾的愛着を生ずる事があるやうなものである。又全くこれと反對の場合の起る事のあるのも此の類である。總じて性的感情の強弱は人によつて異なるものであつて非常に強い性慾を有する兒童もあれば、又正當に發生しながら殆ど自覺へ訴へない程の弱い者もある。これは接觸作用と收縮作用との連合したものである。從來學者は變態性慾を性慾感情が特別に早く發生したものと認めてゐたか、これは大なる誤りで、普通の性慾感情が幼時に發生する場合すらあるのである。又感覺の強さも變態性慾とは何の關係も無く、特別の強さに達しない變態性慾もあり、又普通の性質を有せる性慾感覺にも亂覺過敏と稱し得るものかあつて、兒童時代に非常に強い感覺を有する實例も少くないのである。

兒童の性的生活の現象は勿論同一程度で繼續されるものでなく、年と共に明白となることは云ふまでもない。故に兒童の性的生活の現象は誘惑によつて喚起する事も出来れば又發達を中止して直ちに退歩せしむる事も出来る。それも性的教育の可能なる理由でもあり、性的教育の必要な理由の一部分でもある。兒童の性的生活が同一程度で繼續するものでないことは前述の通りであるが、第二兒童期の終りに於ては特に著しい發達をなすものである。此の時期に於ける外形の發達は驚くべきもので、男児にもつては髭鬚の發生、喉頭の増大、睪丸其の他の生殖器は迅速に發達し、女児にありては、胸廓及び骨盤の形成次第に女性の特徴を現はし來り、卵が熟して月經が來潮する。又此の時期に於ける精神上的の發達も著しいもので、凡て内部に推積して外部に活動せんとする状態となる、男児が旅行、冒險、理想的計畫又は宗教的活動等に加はらんとするのは皆此の時期で、監督宜しきを得ず、又は全りに壓迫を加へると、往

第四章 性慾生活の發達

々家出をなし、終生放浪生活に親しむやうな結果を招來する。一體に此の時期は倫理觀念が自覺的大膽と交替して、生氣全然一變するものである。又、中にはこれと反對に非常に憂鬱的となり、哲學や文藝に親しまうとする者もある。前章に説明した浪漫的な戀愛を夢見るのも此の時期である。女兒にありては不明瞭なる想像が明白となり、次第に女性的特徴を現はし、特に羞恥感情が甚だしく發達して、第二兒童期に存在する亂暴な觀念や舉動は全然消滅するものである。

從來人は春機發動期を以て性的生活の發達及び成熟を意味するものとなし、或ひは陰毛の發生胸廓の發達等外的現象を以て其の標徴とし、或ひは最初の月經又は射精を以て其の標徴とした。

併し射精が既に生殖可能或ひは性的既熟の證據でもなければ、月經が生殖可能の證據でもないのである。以上の觀察研究によれば、少くとも第一兒童期の第一年に於て性慾作用の成立する事を示してゐる。殊に此の際は心理的性慾が大なる役目を

なすものである。故に醫師、教育家、両親又は性慾學專攻者は外的現象は僅かに其の一部分であつて全部ではないと云ふことを忘れてはならない。即ち性慾作用の始まりは遙かに其の以前であつて、成熟は其の後多くの手を経なければならぬのである。

併し、吾人は上述の説明によつて、兒童の性慾生活を證明する個々の現象を紹介したとは云へ、これ等の現象が悉く一般的であつて、有らゆる徴候が悉く觀察し得られたのだと云ふ事は出来ない。吾人は説明の都度屢々機會を捉へてこれに制限を加へて來たが、最も屢々現はれて來るものは、既に紹介した如く心理性慾的現象である。時には非常に微細にして且つ精密なる研究によらなければ、確定し得ない程の徴候をも舉げた。これを要するに吾人は一般に非性慾的と認められつゝある兒童時代にも、既に或る意味に於ける性慾生活の存在せる事を説明したのである。

此の説明を完成するには、次ぎの數言を附け加へなければならぬ。次條で説明

する去勢の結果の示す如く、性慾作用の未だ確認せられざる時にすら、既に性慾作用が存在してゐるのに、十四歳又は其の以後に於て性慾生活を認め得ざる兒童がある。又十五六歳にして遺精を行ひながら性慾を認め得ない場合がある。大抵の場合には遺精を行はずとも性慾の覺醒を認め得べきに、自瀆は勿論其の他の心理性慾的作用等一切の性慾行爲が認め得ないのである。

これは勿論道徳の結果ではなく、平均的に發達が遅緩したのに外ならない。斯くの如き兒童は色盲が色彩に盲するが如く性慾に對する理解をもたない。併し後には次第に普通の状態になつて、唯だ二三の作用の發作が遅れるに過ぎないやうになる。モールは曾て斯くの如く發達の遅れた後、十四歳の終りで性交の際時々射精をしながら、自瀆を行はなかつたものを見たと言つてゐる。斯くの如きものも精密に觀察すれば、必ず性慾を發生すべきものであるが、其の時期の遅れるのは云ふまでもない。全くこれは性慾的理解の欠乏してゐる爲めで、モールは又勃起及び遺精

を行ひながら、二十歳にして性交の際射精し得ざる人を見たと言つてゐる。斯くの如きは決して教育の影響又は所謂性的神經衰弱ではない。寧ろ後天的原因によつて發達が遅れたものと見るべきである。

以上稍や複雑な研究であつたから、或ひは讀者の理解が充分で無かつたかも知れないが、茲には生理學的と以上の所論を歸納して見る。併し、難解な點では寧ろ今迄での説明よりも難解である。殊に末段に至つて神經的學理と化學的學理とを對比研究する部分までは、可成り専門的知識の必要な説明であるが、其れも所謂讀書百遍自ら通ずて、云はゞ術語の上の難解であるから、少し注意して前後對照されたならば、恐らく釋然たるものがあらうと思ふ。

内分泌の事は既に分に大略ながら説明して置いた。男性の生殖能力は精子の發達が睪丸内に起つてから生ずるものであるけれど、睪丸の活動は既に其の以前から開始されつゝあるものである事を、讀者は既に記憶してゐる筈である。(女性の卵巢

第四章 性慾生活の發達

も同じ事である。内分泌の項参照)

從來は勿論現今に於ても、此の活動が閉却されてゐるのは、睪丸は單に精子のみを製造分泌するものと認むるが故である。併し實際は尙他の方面にも睪丸は種々の作用を及ぼしてゐるのである。

睪丸摘出即ち去勢は肉體上並びに精神上に著しい影響を與へるものであつて、其の時期が早ければ早い程其の影響は甚だしいものである。此の際起る現象は第二性的時質(生殖器以外の男性的時質)の退化であつて、鬍鬚を生ずる事無く、大抵の場合大なる脂肪組織生じ、骨格の發達状態も變化して、聲は兒童時代の儘變化無く、又生殖器の發達を休止し、陰莖及び攝護腺等は矮小となるのが常である。如何に早く睪丸摘出してても男女の性的區別は困難ではないが、代表的な性的差異は發達せずに終るものである。

從來は精子の分泌が第二性的時質に影響すると云はれてゐたが、近來は此の説は

否定せられ却つて、次ぎの如き新説が確認せられた。

第一、精子發生の開始された後、睪丸を摘出してても、從來唱へられた如き結果を生ずる事は稀れで、唯だ性的時質を多少弱むるに過ぎない。

第二、睪丸摘出を幼時に行へば、其の結果は顯著である。

第三、精子發生の前即ち第二兒童期の最後の年に睪丸を摘出すれば其の結果は更に少い。

若し精子が第二性的時質の成立に重大な關係を有するならば、前記三ツの場合の如何なる場合に睪丸を摘出してても同一の結果を生ずる筈である。故に第二性的時質の成立は精子と何等關係なく、更らに其の發生以前に起る、ある他の作用(即ち内分泌)に關係を有するに違いない。

睪丸摘出と其の結果とに關する學者の説の一致しないのは、睪丸の作用の精子發生前に人體に及ぼす影響が人によつて異なる事を説明するものである。生殖可能期又

兩性の性慾及其差異

第四章 性慾生活の發達

は月經期が人に早晚の差がある如く、他の作用にも人によつて早晚の差があるのである。故にたとへ同年齡に睪丸を摘出して、各人各様に異つた發達をなすもので或る者は骨盤が發達し、聲、髭鬚の發達全く普通の状態であるのに、他の者は全然これ等の特質の發達を妨止せらるゝ事がある。従つて彼の六七歳で去勢された宦官が、外形は全然去勢者の如き状況を呈しながら、劇しい戀に陥るが如きは決して怪しむに足らない。

これ等の結果は皆支那の宦官及び最高音を出さしめる爲め去勢された伊太利の音樂少年から得た結果であるが、人間の去勢的試験は其の結果を見る事が容易でないか、茲には更らに動物の實驗について有の説明を試みよう。

彼の幼時に去勢せられた牡馬が、全然性慾の發達を妨止せられたものもあれば、又或るものは明かに性慾作用を有するものもあるのは、幼時に於ける去勢が既に明かに其の時期の遅い事を證明するものである。

單に此の一事實を以てしても、睪丸は精子の發生せざるうちに、既に牡動物並びに人間の男性の性的に大なる意味を有する作用を生ずる事が證明されるわけである。

女性の場合には動物に於ても人間に於ても去勢される事が男性よりも稀れであるから、其の胚種腺（即ち卵巢）に對して上記の現象を男性の場合の如く強く主張する事が出来まい。併し、今日までの動物試験の結果と、婦人の去勢を實行する或る特殊の國を旅行した人の觀察とによれば、男性と同様の結果を生ずる事を證明して餘りある。即ち女性の卵巢も性慾の熟する以前から既に或る重要作用を生じてゐるのである。

春機發動期の前に一方の睪丸を摘出して其の性慾作用を試験すると、他の一方の睪丸に代償的肥大現象が起る。併し春機發動期の後に於て一方の睪丸を摘出すれば斯くの如き現象は殆ど無く、又有つても其の程度は極めて弱い。

兩性の性慾及其差異

斯くの如く胚種腺が胚種細胞を排出せざる間に於ても、既に或る作用の行はれつゝある事は確實なる事實であるが、其の作用は如何なる種類のものであるか、其れが即ち内分泌であるとはまでは解つてゐるが、不幸にして胚種腺の内分泌に關する知識は其の實驗が困難であるのと、其の刺戟素の化學的成分が未だ充分明瞭でないのとで、他の臓器の分泌作用のやうに明白に説明し得られないのを憾みとする。吾人は今此の問題の説明を試みないで、先づ第二性的特質の發達の上に及ぼすべき胚種腺の影響を左に述べる。

以前には胚種腺は直接或る影響を及ぼすものとせられてゐたが、近代の學者殊にフオン・ハルバンはこれに反對して異説を立てた。其の説によると、胚種腺は形式的なる機關を形成する刺戟を與へずして、保護的刺戟を與へるものである。既に胚胎した卵が性的結構を有する如く、胚種性並びに其れに相當する性的特質にも、同様の結構を有するものである。これを云ひ換れば、性は胚種腺の存在によつて定ま

るものではなく、寧ろ胚種の性及びそれと相當する性的特質が、既に卵の受胎する時共同的なる原因によつて決定するものである。

併し、第二性的特質に及ぼす胚種腺の影響は、ハルバル及び其の他の學者も承認する處であつて、要するに其の差異は唯だ一つ其の影響を形式的とし、他は保護的とするに過ぎないのであるから、斯くの如き難解な科學的差異に懸念せず、讀者は兎に角第二性的特質に及ぼす影響を認めて置けば宜しい。

此の際影響する學理に、神經的學理と化學的學理との二つがある。

第一の神經的學理とは、中心神經組織に傳播せらるゝ刺戟によつて、肉體の或る部分即ち髭鬚或ひは男子の喉頭、又は女子の乳腺を生ぜしむる反射作用に類する作用を有せる刺戟が、睪丸及び卵巢（即ち胚種腺）に起る事を云ふ（遠心的作用で營養神經が刺戟されるのであらう。）

併し、恰かも幼少時代から或る感覺機關が缺乏して、中心神經組織の其れに相當

兩性の性慾及其差異

した部分が片輪となつた時と、此の幼少時代に去勢した場合と、事情が非常に類似してゐる。此の見方によれば、去勢の際に於て機關に起る明瞭なる發達阻害は、腦の或る部分的萎縮と解釋しなければならぬ。

神經的學理に反して、近頃次第に内分泌作用の化學的學理が認めらるゝに至つた。此の事は從來全く知られなかつた諸腺から起る化學的作用を吾人が知つたのと密接の關係を有するものである。

例へば既に説明した甲狀腺の作用を見ても理解し得られる。此の化學的學理によつて、胚種腺にも一種の化學的物質が存在し、第二性的特質を成立するものである事が闡明せられたのである。

又、禁慾の結果生ずる不幸なる結果を説明するにも此の學理を利用して、此の腺の分泌物が堆積すれば毒作用を起すと説明する學者もある。(ホルモンの毒作用といふ。)

尙、睪丸中に第二性的特質を發達せしむべき腺分泌を生ずる能力ありとしても、茲に研究しつゝある時期は、尙未だ精子の發生しまい兒童時代であるから、此の分泌物中に精子を含まない事は云ふまでもない。

幾度か説明した如く、近頃の研究によれば實際睪丸中には二重の活動があつて、佛國の或る醫師は睪丸中に二種の腺のある事を説明した。即ち精子を作る腺と間質腺とである。精子の製造は云ふまでもなく生殖の爲めで、間質腺は血液の循環或いは淋巴液の循環の中に混入して、第二性的特質を發達せしむる或る化學的刺戟素を分泌する作用を有する事が證明されたのである。

従つて去勢は精子の製造を破壊するのではなく、此の間質腺の分泌物を妨害するのである事が明かにせられた。

神經的學理又は化學的學理の何れを撰び、何れを採るにせよ、兎に角精子の發生せざる以前の兒童時代に、既に有機體に有力なる作用を及ぼすべき現象が睪丸及び

第五章 男女性慾の比較

卵巢中に存在する事は明かなる事實である。

従つて精子の發生せざる以前の兒童時代に、既に一種の性慾生活ありとなす吾人の以上の説明は、此の生理學的事實によつて説明せられた譯である。

たい前項にも云つた如く、其の現象は同一程度に繼續されるものでなく、又兒童によつて強弱もあり、遲速もあるが、特に顯著なのは心理性慾的現象である。

第五章 男女性慾の比較

男女性と其性情の差

身體の構造及び組織が、男女にありて多大の差異ある以上は、心理作用にも差異

あるべきは勿論のことであつて、佛國の革命家ミラボーが「人の身體に男女の差あるも、魂には男女の差なし」と云ふた言葉は、果して魂に男女の差なきか否や疑はしい事である。

男子の身體にふさはしき性情は、男子の身體に宿り、女子の身體にふさはしき性情は、女子の身體に宿るものであると云はれて居るが、さうすれば、魂にまでも男女の別があると見て不可ないものである。

男女の性情の差異、それは何から來て居るか？、ワイニンゲルに依れば、男女の性情には絶對的な差異はないものであるとされて居る。勿論絶對的な差異はないかも知れないが、何がしかの差異はある。何がしかの差異があるとすれば、概念的にそれを男女の差異と稱して不可ない。

而して男女性の差異は何に依つて起るか？と云ふに、性の起原は既に單細胞にあることを述べた。故に男性の生殖細胞である精子と、女性の生殖細胞である卵子とに

性の起原を存する。

獨逸のゲー・ヒルトの『發生及び遺傳的特質』に依れば、「精子は形こそ小さければ、其の小さき體の凡ての部分を、極度に活動せしめて、卵子と結合せんが爲めに働らき、而して一度是れに逢着するや、驀然卵子の中心に其の頭部を突入するが如き、男子の性情は既に精子に於て是れを有するを見ることが出来得やう」と説いて居る。

兩性の性情と生殖細胞との關係は、簡單に一言で是れを説かうとすれば、其の間に種々の誤りが生じ易いものであるが精子の運動に現はるゝ動作は、重學の所謂動力の發作であるが、卵子の性質はそれと反對であつて、其の中に潛力を藏するものである。是れ即ち男子の性情の自動的であり、女子の自動的であるのと頗る似て居る。兩性の性情の差異と云ふものには、永い間の遺傳關係とか其他いろ／＼な複雑した事があるが、精子と卵子との動作の差異は、男女兩性の性情の差異を來した基

となつて居るものであらうと思はれる。

女子が精神的に感受性に富むのは、女子の自動的なるによりて知り得られやうが、或る學者の唱導するが如く、感受神経の男子よりも發達して居ると見るのは、過當であるやうである。唯だ頗る些細なる刺戟を傳へらるゝことあるも、容易く是れに感應するといふに過ぎないやうである。

女子の性情が、既に受動的であるとすれば、其の精神が微細の感應をも、起すは當然のことであつて、恰かも男子の性情が自動的である故に、好んで積極的舉動に出づると同一の理である。若し女子に此の機微なる感應性を缺かば、受動的なる性情の天賦は、有れども無きが如くに終るではあるまいか。要するに、女子の感受性に富める其精神作用が、男子の積極的發動を受けて、之れと適合せんとするに於て妙用を現するものである。

男女の智能の差に就いては、古往今來議論少なからざれども、公平なる多數の學

兩性の性慾及其差異

者の意見に據れば、女子は自己に接近せる事物、又は既に結局に達せる事物、乃至は具體的の物件、及び事物の皮相にのみ多く感興を有するが、男子は是れと反對に未來又は事物の結局に達せんとする途上にある際、又は抽象的の事に興味を有するといふに一致するやうである。

一部の書を讀むに當りても、女子は讀了するに早く、其の事柄を記憶するにも早けれども眼光を紙背に徹せしむる底の事は甚だ少ない。

併し彼のラジウムを發見し、良人に代りて大學に教授たりし、キュウリー夫人の如き女性もあるが、それは研究物が具體的の科學である故に、彼のやうな深遠の研究もなし遂げ得たのであるが、哲學の如き抽象的のものに關しては、それに對して充分深い研究をなし遂げた女性は殆んどない。即ち女性にして大哲學者たることを得た人はない。故に女子の性情は理學者たり得べきも、哲學者たるを得ないと云ふて不可ないだらう。

女子は概して些少の刺戟に對しても、興奮的に精神を働かしむる傾向あるもので斯の様に女子が、目にし、耳にする現象に刺戟せられ易き感受性は、理學者たるに適する智能を開發するに可なる所以であつて、更に又男子の如く、生活其の他の問題に依つて、未來を苦慮するの要なく、簡單なる目前の生殖作用を營めば其の天分を盡し得ると云ふことは、女子をして思想家哲學者として成功せしめない、多くの原因ではあるまいか。

又女子が感受性に富み、身心の疲勞し易い傾向を有すると云ふことは、其の血液中に水分多くして、赤血球の少きに見るも分明な事實であるばかりでなく、些少の物理的若しくは、心的刺戟に對しても、感じ易きことは、其の人をして疲勞し易からしむるものである。そして此の疲勞性は、女子をして外的活動に適せしめず、靜處して生殖的作用を營むのみに適せしむるものゝやうである。

尙ほ月經の週期性は、當だに女子をして其の體力に影響を與へるばかりでなく、

第五章 男女性慾の比較

其の智力の上にも影響を與ふることが大なるもので、女子の智力の最も鋭敏であるのは、月經を去つて身體力の平生に恢復された時である。

是れに反して月經時には、智的心理作用が最も遲鈍となるものである故、此の期間に往々犯罪を敢てするものがある。

斯くの如く、女子の生殖と智的作用とが逆比例をなして居る事實を見れば、蓋し女子の天分の那邊にあるかを察知するに難くはないであらう。

男女性慾發現の差異

性慾生活の發達に就いては既に是れを述べた。故に今茲には成人に於ける、男女性慾發現の差異に就いて述べやうと思ふ。

女子の性情は受動的であつて、生殖作用として最も重要な妊娠を以て、其の天

分となすものであることは、前項にそれを説明した。

女子の性情、女子の天分が前項に説明した通りのものであるが故に、女子の性慾發現の状態もそれに適合したものである。

女子は概して秘密を守つて、其の實際の事を語らないものであるから、女子の性慾に關しては充分確實な事は知れ難いが、併し大抵の女子は其の性情の通り受動的であつて、男子の性慾發動は自動的である。

斯様に女子の性慾は受動的であるがその、發動状態を見るときは、女子は性慾に淡泊なものであるとばかり極めることは出来ない。伯林のブロッホ氏の『現代の性慾生活』に就いて見るも、女子の□□□□□□□□□□、男子よりも激烈であつて、其の持續時間の長いことは否定されないことである。故に男子は自動的であつて□□□□□□□□□□、併し平時は却つて淡泊であるが、女子は□□□□□□□□□□却つて持久的に亘るものであることをも否むことが出来ない。

兩性の性慾及其差異

女性に於ける性慾の分類

女子に於ける性慾の發現状態は前項に述べた通りであるが、女子は□□□□□の場合に□□□□である。逆比例して、平時に於いては性慾に對する羞耻心が、男子よりも遙かに強いものである。故に異性のものを避けやうとする態度を取るの、女子の本性であると云ふてもよい。

併し亢興せる場合は、却つて男子に媚びる態度を現はし、男子と女子との間の状態は、主と従、所有者と所有品との關係を遺憾なく現はして來る。

近代の所謂醒めたと云ふ女性性は、「男と女は從屬的關係や所有者と所有品の關係にあるものではない」と力説する。けれども、長い間の因習と云ふものであらうか。口ではさう云ふ理屈を云ふても、實際は女は男に媚びて其の所有品であることを甘

んする。斯うした點は新らしい女と云ふ人に、誠に皮肉なことである。

既に女は男の所有品に甘んずる態度を現はす以上、男子は女子を所有して居ると云ふ觀念が強い。尤も女子は所有品たるに甘んずる態度を取ると雖も、女子にも所有觀念、即ち男子に對して、「彼れは私の良人だ」と云ふ觀念は無論ある。男と女との結合は愛情に依つて繋がれて居る以上、兩方共に所有の觀念はある、それは愛は與ふることばかりで無くて、又所有することであるからである。

所有の觀念は男女共にあるけれども、男子の所有の觀念は、女子よりも一層強い。それで女子は男子の所有となり、且つ所有者以外のものに對する羞耻の觀念を生ずる故に、女子の性慾の發動が限局される。それが即ち貞操の基礎となつて居る。

であるから、女は一定の男に媚び、其の所有に甘んじて居ると云ふことは、其の天分である生殖作用の任を果すに、却つて良いことであるかも知れぬ。

筆路が多少岐路に陥つたが、男女相互に愛情に依つて結合され、□□□□□□□□
兩性の性慾及其差異

第六章 變態性慾に於ける男女の比較

斯様な状態であるから、男子は或る女を眞實に愛して居つても、同時に更に他の女をも愛し、又時には賣春婦とさへ關係することが出来る。斯うした事は男子には餘り珍らしくないことであるが、女子にはさう云ふことは極めて稀である。勿論物には例外はあるもので、こゝには只一般の場合を云ふのであるが、例外の場合には一人の配偶者で満足できぬ様な女も稀にある、併しさう云ふ女は、性慾衝動の爲めに女としての性的羞恥心を失つて、性的に放縱な生活をなす淫婦である。

第六章 變態性慾に於ける男女の比較

性慾の病的發現

變態性慾とは一種の病的性慾であつて、正常ならざる不自然なる性慾である。此

の變態性慾に屬する性慾の種類及び分類は學者によつて一様でないが、有名なる精神病學者として變態性慾學の建設者たる獨逸のクラフト・エビングの分類が最も完全であるが、今便宜上左の分類に従つて説明する。

(一) 顛倒的同性間性慾

(二) 色情狂

(三) 准色情狂

(一) 顛倒的同性間性慾とは、同性即ち男性と男性、女性と女性との間に聯絡せらるゝ處の一種の性的感情若しくは性交であつて、變態性慾中最も神秘的なるものである。

(二) 色情狂とは、性慾の異常なるもの即ち性慾に障礙を受けた精神病者の總稱であつて、其の名の如く色情に狂つて荒れ廻るもの、或ひは沈鬱にして煩惱に苦しむもの、或ひは屍體を姦し、動物を姦するもの、又は女子を傷つけ、或ひは虐殺

兩性の性慾及其差異

第六章 變態性慾に於ける男女の比較

して快美感覺を満足するもの等種々様々であるが、要するに病的にして正常ならざるを特徴とする、色情狂を前の同性間性慾に比すれば、頗る殺風景であつて何れの方面から見ても神秘的な處はない。

色情狂にも亦種々の區別があるがそれは既に前に述べた。

(三) 准色情狂 とは、純粹の色情狂ではなく、病理的にこれに近いものを云ふ。これには知識の低き者、道德の薄弱なる者、或ひは知徳尋常なるも單に克己心の乏しきが爲めに罪惡と知りつゝ犯すもの等がある。

同性間性慾

性慾感情が異性に對して起るのは極めて普通の狀態で自然であるが、茲に同性に對して性慾的快感を得んと慾する處の甚だ不自然にして性慾の本旨に戻つた、一種

の感情を有するものがある。これが所謂同性間に於ける顛倒性慾即ち同性間性慾(又單に同性愛とも云ふ)であつて、簡單に云へば、男性にして男性を慕ひ、女性にして女性を慕ふのである。故に同性間に於ける顛倒性慾は其の關係する男女性によつて、

(一) 男性間顛倒性慾

(二) 女性間顛倒性慾

の二種類に分つ事が出来る。

性的狂崇

性的狂崇は異性の體部例へは乳房、臀部、手、足、脛、頸等に特種の性的感情を有し、或ひは異性の身體につけた物例へばリボン、櫛、ハンケチ、洋傘、靴、下

兩性の性慾及其差異

第六章 變態性慾に於ける男女の比較

馱等に對し性慾的狂崇を感ずるのである。前者を性的體部狂崇と云ひ、後者を性的庶物狂崇といふ。

(一) 性的體部狂崇 日本では衣服の仕立工合の關係から、女性の手足は勿論脛も現はれ、夏時などは殊に胸部腹部までも見られることがあつて、日本人には體部狂崇者は割合に少いが、西洋には女性の白い手を見たいだけで性慾を満たすものさへある。これは西洋では常に手袋と靴下を用ひて、素手素足を見ることも稀れであるので偶々これを見ると激しく精神を刺戟される爲めである。これと同一の理由で、或る監獄の囚人が女の長い髪の毛を一本大切に保存して居た例がある。即ち髪の毛によつて女性を聯想し性慾を満たしてゐたのである。體部狂崇が熾烈になると、雷これに觸れたり見たりするばかりでは満足しなくなる。彼の臀肉切りの如きは正しく體部狂崇の高まつたものである。彼の人込みの中で婦人の衣服を切つたりするもの、此の變態性慾者である。

(二) 性的庶物狂崇 これは庶物に就いて異性を聯想する倒錯狂である。以上の性的狂崇は男子に屢々見らるゝも、女子には男子の様に熾烈なものはない。

殘忍性色情 (サヂスムス)

殘忍性色情とは異性を虐待若しくは殺傷して性慾を満たす一種の性慾倒錯である。其の名は佛國の小説家サヂーから來しゐる。サヂーの小説中に此の種の性慾を描いたものがあるのである。そして是れは男女共に見らるゝが、女に於ても相應に多くの例がある。

被殘忍性色情 (マンヒスムス)

被殘忍性色情とは殘忍性色情の反對で、異性から受動的に虐待を受け、性慾を飽

兩性の性慾及其差異

第六章 變態性慾に於ける男女の比較

満する一種の性慾倒錯である。やはり此の種の性慾を描いた埃國の小説家ザツヘル・マツツボの名から其の名稱が來て居る。

陰部露出症

野蠻人若しくは野蠻時代には局所を露出するに非ずんば刺戟し能はぬ人間及び時代があつた。此の意味に於て此の種の性慾倒錯者は原始的性慾の保有者であるとも云へる。

然し多くは白痴、癡愚の如き先天性の精神病者、若しくは白痴に類せる精神病者に見る事が多い。

獸姦

不自然なる性慾遂行も獸姦に至つては言語に絶する。これは概ね古代的遊牧時代は行はれしもの、如く、今日文明人種の間には白痴、癡愚の如き精神病者に非ずんば、これを耳にする事は殆ど無い。

(附) 早熟性慾

これは變態性慾のうちに論すべき性質のものではないが、便宜上茲に附記して置く。

早熟性慾として病理學上の實例に屬すべきものは八歳、五歳、二歳又は其れよりも以前に月經期に達した女性である。ヤルスの報告によれば、二歳にして月經を見八歳にして妊娠した女性がある。勿論十歳乃至十二歳で妊娠した例は少くない。

或る佛國の醫師の觀察によれば、生後三ヶ月にして乳腺生じ、續いて陰部及び兩

兩性の性慾及其差異

第五章 變態性慾に於ける男女の比較

腋に發毛して月經を見た女性がある。此の醫師は又生後七ヶ月にして規律的に發達した女兒を見たが、容貌既に童顏を有せず、肉體も既に充分發達してゐたさうである。ケープハルズの研究によると、生後直ちに月經を見た女兒が一人有つたが、生後一ケ年以内に月經を見た例は少くないといふ。

ニユー・オルレアンからの報告によると、生後三ヶ月にして月經現はれ、而も規律的に其れを反覆した女兒がある。此の女兒は發育も非常に早く、四歳にして四分の一米突の身長を有し、乳房の大きさは大なる密柑程あつたといふ。斯くの如く女性の生殖器關が早く發達すると著しく乳房が發達するのが常である。

キツシユの研究によると、早熟者は早期月經と共に他に多くの早熟的徵候を呈するもので例へば、

- (一) 著しき脂肪の發達。
- (二) 生齒の早き事。

- (三) 容貌の大人振る事。
 - (四) 生殖器の發達迅速なる事。
 - (五) 腋窩及び陰部に毛の生ずる事。
 - (六) 大陰唇及び乳房の發達する事。
 - (七) 女性的骨盤の形成する事。
- 等である。又他の精神作用が遅くるゝに反し、性慾が早くから發達するものである。
- 解剖的事實に於ては卵巢内に病理的發見を爲す事ありて、從來これに關する報告は少いが、豫想外に其の實例の多い事は多くの學者の信する處である。尙小女の卵巢内に成熟した卵を發見した事もあれば、早産の女兒に發見した事もある。五歳の小女にして既に十五の小囊を發見した事があり、リエジョアは二歳の女兒を解剖して二回成熟した卵を發見したといふ。

兩性の性慾及其差異

第五章 變態性慾に於ける男女の比較

男兒にも斯くの如き場合が無いではない。例へばブルシユが一八二〇年に發見した三歳の男兒は春機發動機の徴候を悉く供へてゐたといふ。其の聲は十五六歳の少年に似て居り、弛緩した陰莖の長さは九・六仙米突、根元に於ける太さは七・二仙米突で、小女又は婦人の面前では陰莖勃起し、舉動活潑となり、女性の生殖器に手を觸れようとしたといふ。自瀆はなかつたが、其の他多くの早熟の徴候を有し、第一門齒は生後三ヶ月にして既に上顎に生じたといふ。

ブルシユは又メアードの報告して在る男子の實例を擧げてゐる、此の男兒は生後一ケ年たらずるに早くも春機發動期に達し、五歳にして大人の如き容貌をもつてゐたが、肺結核の爲めに早世した。其の他五歳にして性的部分の完全に發達し、鬚鬚其の他の男性的徴候を具へたもの、例を擧げてゐる。

ガルの脳相學が流行した時、斯うした性慾早熟の原因を、ガルが性慾の中樞とした小脳の著しき發達であるとした。

楠博士が松葉腺疾患の例として諸家の實例を擧げてゐる。今其の内の一二例を紹介する。

四歳の男子（病名松葉腺畸形腫）生來活潑の兒なりしが、三歳の頃より臆病者となりて身體は急速に發育し、精神と歩行とは障害せらるゝも、食欲大に振ひ、陰莖は著大となりて其の長さ九仙米突を算し、睪丸は鳩卵大に増大し、陰毛は一仙米突の長さまで發育し、制し難き手淫の癖に陥れり。（エイブル）

五歳の男子（病名松葉腺神經膠様肉腫）身長一二七仙米突にして陰毛並に鬚鬚を發生し、二歳に達せざる前より早已に陰莖増大且つ勃起して、時々射精するも快感は伴はざるが如く、而も其の精液を鏡見せしに確かに精虫（精子）あるを認めたりと。（ベリッツイ）

然るに如上の場合と反對に、全部の發達が遅く、後年に至つて漸く性慾の成熟するものがある。即ち俗に云ふ侏儒と稱するものであつて、其の性慾状態を研究して

見ると種々の興味ある發見に遭遇する。一般に侏儒と稱するものには尙僂病のため
に其の發達を妨害されたものを含んでゐるが、科學上の侏儒といふのは、身體全部
の發達の小さいながらも平均してゐるものを云ふ。

モールは此の侏儒が共同生活をしてゐる處で、其の性慾状態を研究し皆特殊の状
態にあるのを發見した。彼れ等は同一の家に住み、共同の労働に従事してゐるが、
男女兩性の間は極めて冷淡で、互ひに敬語を用ひつゝ、交際をしてゐる。男性の性慾
機關は皆完全に發達してゐるが、たゞ三十歳になる一人の侏儒は其の發達極めて不
完全であつた。性慾の發達も普通であつたが、皆年長者に愛着をもつてゐたさうで
ある。

或る伊太利人は性慾の發達不完全で、二十八歳に至つて初めて陰毛を發生したと
いふ。然し或る研究者は侏儒にして男女間に戀愛生じ、妊娠した事を報告してゐる
これを要するに、老年に至るも性慾の減退せぬ所謂性慾達期症と稱すべきものは非

常に多數であるが、純粹の晩熟性慾は餘り澤山無いものと見へる。

猶、性慾鈍麻即ち性慾欠如等の病的な例もあるが、其れ等を一々茲に擧げて説明
する事は煩はしくもあり、餘り必要もないから、こゝにはそれを省略する。

女性に於ける同性愛

人の異性に對する感情即ち色情と、性慾は最も普通且つ自然なるものなれども
茲に同性に對して快感を得んと欲する所の、甚だ不自然であつて而かも性慾の本旨
に反れる一種の感情を有するものあるは怪しむべき事である。之れは前にも述べた
同性間に於ける顛倒性慾、乃ち同性間性慾（又單に同性の愛とも云ふ）であつて、
平易に言へば男性にして他の男性を戀ひ、女性にして他の女性を慕ふ類のものこれ
である。是れに由つて同性間に於ける顛倒性慾は、其の關係する性乃ち男女に依

第六章 變態性慾に於ける男女の比較

りて、(イ)男性間に行はるゝもの、即ち男性間顛倒性慾、(ロ)女性間に行はるゝもの、即ち女性間顛倒性慾の二種に分かつ事を得るのである。

抑も人の相愛し相慕ふは、親子兄弟を除きては、異性間の一慾であつて男は女と女と男を交互に牽引するを原則とすれども、同性即ち男と男と、女と女と相對しては、普通一遍の交際の外に、色慾の起る事なきは云ふ迄もない、普通同性に對して性慾の起らざるは、全く自然の然らしむる所であつて、其の理由と見るべきは、(一)同性は珍らしからざること、(二)是れを以て生殖を遂ぐることに能はざるものと思惟すること、の二點であつて其珍らしからずと云ふ事情は、(一)體格の同一なること、(二)同じ生殖器を有すること、を含みて其の間に異様なる感情の起る事がない。之れを要するに同性關係を不自然とする天意に依りて、醜怪陋劣なる意味の感情を授けられたる結果であるとし知るであらう。

右の理由に由りて考ふれば、同性間に行はるゝ性慾は顛倒であつて、尋常では決

して超ることのない筈のものであるが、實際はそうでなく此の顛倒性慾に溺るゝもの案外多いのは、事實の證するところである。

同性間の愛情は何故に起るか、又其の愛情の頗る濃厚なのは何故であるか、夫れは茲に深く立入りたる説明を加へずとも讀者は略推察せらるゝであらうと思はるゝが、兎に角人間より愛情或ひは戀なるものを取り去れば人生は頗る寂寞なるものとなり、幾多の人類の美點の大半を失ふに至るであらう、人間は成熟すると共に此の愛情を或る者との間に交換せんとするの念旺盛となるもので、其の或る者とは第一に異性であるが、其の病的なるものに至つては同性間に於て愛情を交換して満足し、併も其の愛情が頗る熾烈に至るを常とする、又同性間の愛は常に病的に來るばかりでなく、愛情を交換する異性を物色するに困難なる場合は、自然の衝動として其の鬱勃を漏らさんが爲めに自然に同性の愛をして熾烈ならしむるのである。彼の囚人殊に女囚の間に於て最も熾烈なる同性の愛に耽り、之が爲めに他の者との間

に嫉妬の情火を發して、時に獄内に於いて傷害等の事件を發生する事も稀に見聽きする所である。

純然たる顛倒性慾でなく、愛情を交換する異性が、物色されない爲めに起る同性愛は、男性間よりも女性間に多い、そして女性間の愛情が熱して來ると第一に手紙の書方が艶書の如くになつて、必要もないのに匿名したがる、寫眞を撮す場合が多くなる。髪の方、髪飾り等を成る可く同じ様にする。女學生なら學校で工女ならば工場で逢ふのを無上の樂みとして、早く家を出る無暗と訪れて二人は公園や縁日に散歩く又何れの場合でも意味ありげな笑ひを交換する、話は常に長く、相手の名を書籍に手帳に樂書して止まない。

閑な看護婦、女工は場主の虐待が導火となり同性愛に陥り墮落ち若くは情死を企つるに至る例が尠くないが、妙齡の春を徒に腐らして適當の配遇を得ざるに依り終りに同性に依つて慰むる事となるのも澤山ある、看護婦間に於ける同性の愛は、其看護

婦會が繁忙だと從て弊害は無いが、閑散で常に狭い座敷に閑居し一つ寢をする場合になると種々と風評が看護婦間に立つものであるとは某看護婦會長の談である、昔の御殿女中には斯様な奇怪事が盛に行はれたもので、今でも其遺風が残り華族の家庭には往々ある。歐洲ではホテルの女中に多いさうである。又女店員にも昨今此傾向が見える様になつた。其點にゆくと娼妓にゆくと娼妓には割合に多いので、客無き夜を朋輩と轉寢などして圖らず動機を爲すらしい、無いやうで有るは此娼妓間の相愛で百分比例を以て示すと日本は四十五、伯林は二十五、巴里は二十五と云ふ事になる。

情死の内にて、女性間の情死には殉死的の情死が多い、義理合より犠牲となる者が尠くない、意氣相投するものもある男女が不都合に情死する事はあつても、同性間の情死は男でも女でも皆合意と云つて差支ない、支那が男色が盛だが女性間の戀愛は尠く、小説としても林蘭香杏花天の二書は有名なものだが、他には餘り聞かぬ、氣

候などの關係もあるのであらうが、印度は盛んで詩人は詩を作つて女性間の戀を激賞し「女同士の戀は高尚で愉快だ」と迄謳歌して居る、近時各地に於ける女性間の情死なるものは、社會の進展に伴ふ極めて卑近なる一事實で然も同性は秘密が嚴守される丈に之を取締る事が甚だ困難で、寧ろ不可能と云つても宜い位である、即ち各自の道義心の發動を待つて根絶するより方法は無い。

同性間性慾に耽る女の型

女でありながら、男らしい容貌、男らしい性格を有するものがある。さういふものは、必ずしも同性の愛に耽るものとは斷言し難いが、多くさうした傾向を有するやうである。此の種のもものは、男裝をなし、又、男子のする職業を喜ぶもので他の女性と相識となるときは、男性が女性に對する時のやうな親密な交際をなすに至る

ことが多い。

ギツシユ氏の實驗した一例は、或る貴婦人が十六歳の時結婚し、其後六年を経て離婚となつた。其の婦人は身體頑強であつて、酒を好み、煙草を喫し、男裝をなすことを好み、同性を愛する傾向著るしかつたといふ。

又、クラフト・エービング氏の示したものは、×嬢といへる三十八歳の婦人である。此婦人は一千八百八十一年の秋、激烈なる背痛、及ば偏執性不眠症の爲めに、「モルヒネ」及び抱水クロラルを服用し、其の中毒に依つて、エービング氏の診察を受けたものであるが、其の際、衣服、容姿及び態度に於て驚くべき印象を能へた即ち男子の帽子を被むり、頭髮を短くし、男子の襟飾を着け、上表を男子風に、長くし、男子の長靴を穿てる等であつて、其態度は一般に男子の如く、音聲は稍低く唯だ胸部及び骨盤に於て、女性的構造を見るのみであつた。

×嬢自身の語るところに依るに、其の少女の頃から、女子的職業に就いては、何

等の興味を感せず、乗馬とか、其他男子の爲すことを好み、舞踏のやうなことは大嫌ひであつたといふ。斯くて一千八百七十二年までは、異性者は勿論、同性者に對しても、何等好愛の情を生ずることがなかつたが、其の後他の若き女性と親密な交際を結ぶようになつてから男子と交際することに嫌悪を感じ、其の愛看する女性に對して、犠牲とならんとまで欲する念が頻りに起り、そして衣服態度容姿のすべてを男性のやうにしやうと決心したのであると。

又其の親族の語るところに依れば、嬢は一千八百七十二年以前に、結婚の申込みを受けて、拒絶したことがあつたが、一千八百七十四年、ある温泉場より歸つて來た時、色情的に變化を起し、時としては、自ら女子と認めないやうな舉動を屢なした。それ以來女子と交際して、相手の婦人に向ひて泣き又は嫉妬を起したりする有様は、丁度女に戀を求めて居る男と同じ様であつた。そして、一千八百七十四年、前記の温泉場に於いて、或る婦人が、嬢を、男装の女子と知らずして、互に戀ひに

落ちたが、後ち其の婦人の結婚した時、嬢は沈鬱の間に數日を送り、痛く相手の不實を責めた。

以上の如きは、同性の愛に耽る女の著しい例である。

同性愛の實例

同性の愛といふもの、中には、二つの區別がある。その一つは全然病的な、即ち變態性慾者であつて、異性を嫌悪し同性間に於て愛情を交換し、しかも其の愛情が頗る熾烈に至るを常とする、(前の例の如きもの。)その一つは敢て病的なものでないが、同性の愛に耽る女の實例として、ギツシユ氏や、エーピング氏の示した例を擧げたが、それよりも更に興味深い日本のしかも近頃の實例がある。それは二十年以前女の左甚五郎と謳はれて、都下に名聲を馳せた、女塑像家平谷澄子(本名を秘し

て假名を用ゆ」と稱する婦人であるが、此の婦人は氣質が常に男性的なるのみならず、其の風采も亦男性的であつて、若い時代から、丈なす縁の黒髪を、惜しげもなく切り拂ひ、勇み肌はたの男をとこが爲なすやうな、角刈りの散髪となり、白粉おしろい氣なき素顔すがほに帽子ぼうしを冠り、男の衣服を用ゐた有様は、何う見ても、唯美しいハイカラ男をとことより外ほかは見ない。

澄子は斯様に男性的であつたが、それは必ずしも先天的のものでなくて、彼女の奇しき運命は、彼女をして斯様に男性的ならしめたものである。

澄子の父は、もと某藩の藩士で、世に誇つた時代もあつたが、維新後祿を失つて以來、横濱邊をさすらひ、細き煙を立て、居つた。澄子は十三歳の時、將さに瀾漫と咲き誇らんとする花の姿は、蕾ながら美しかつたのを、獨逸の貿易商某に思はれ未來の妻として、父の許しを得て、某の手許に引き取られた。

其後澄子は、少女のモデルとして、其の頃有名なる塑像家の大家某氏の許に入

することゝなつた。斯くして塑像家某氏の仕事を見つつある中に、澄子は漸次、塑像に興味を持つやうになり、暇を見ては粘土をいちり、人形や、動物の形を造ることを唯一の樂しみとするに至つた、これが澄子の天才を煥發せしめた動機で、少女の塑像が出来上つた後までも、澄子は塑像家の手に残つて、その秘藏の愛弟子となつた。

當時の塑像家某氏は、四十歳を越へ、其の年まで獨身生活の裡に、藝術を妻とも子ともなして、愛著して居つたのであるが、その孤獨の胸に澄子が宿るやうになつてから、初めて戀の焔の燃へたといふも奇しき事である。

昔ならば、桂川の浮名も立つたであらう。帯屋の娘よりも尙ほ若き、此の澄子には、親にも優る師の情が、しみく身に染みたが、それは澄子に取つては、戀であるとはまだ云はれない。

師の塑像家も亦、流石に、無邪氣な少女澄子に、己が戀を明白には打ち明け難か

つた。それだけ燃ゆるが如き情愛は、弟子として薰陶する熱心のうちに洩らされて僅か四年の間に、澄子の技倆はめき／＼上達し、十七歳の時、初めて或る外人から依頼された像を製作して、既に一人前になつたと、師より激賞された。

塑像家某氏は、一代の畸人で、名利に淡く、而も狷介なる性質は、一生を轆轤不遇の間に送らしめ、年老ゆるまで、家を持たない程であつた。勿論其の妙技に對しては、少なからぬ報酬もあつたが、財貨の道に暗き氏は、直ちに贅澤三昧に費し、一錢の余裕も残すことはなかつた。

此の人の傍にあつて、名人肌の感化を受けた澄子は、矢張師の塑像家の様に、磊落な女となり了つた、大杯は傾ける、議論は上下する、猶ほ進んでの果斷決行は、大の男さへ舌を捲いて驚く程であつた。途中で懷中に持ち合せか無いときは、着て居た羽織を賣り拂ひ、其の金で、藝者を揚げて痛飲するやうなことさへあつたが、澄子とて矢張り女である、人知れず身の行く末を思ふて、密に涙を飲むことも、決

して少なくなかつた。

澄子が全く自分に馴染んで居ると見て取つた師は、切なる老いの戀を打ち明けて初めて彼女に結婚を迫つた。澄子も多年の、慈愛溢る、撫育の恩を思ふて、此の師とは、離れ難き情はあつたが、其の妻にとは、餘り意外でもあり、又滑稽にも感ぜられて、其の言を斥けた。

其後澄子は、某銀行員に嫁し、それより六年の間、家庭の主婦となつたが、一旦藝術家風に染んだ彼女には、永く無趣味な田舎に埋もれ居るに堪へ難く感ぜられ、漸く家事を疎んずる様になり、従つて家庭も面白からぬところから、夫は遊蕩に耽るやうになり、それを幸ひと、遂に夫と離別して、慕はしき恩師の許に、走せ歸つた。

此の意外の珍事に、師は愛兒の歸り來つた様に喜んで、彼の女を迎へたが、既に處女にあらざる彼女は、人の情を汲むことをも知つて、遂に年老いたる師との樂し

第六章 變態性慾に於ける男女の比較

共同生活が成立した。初戀の成立した師の喜びは、如何ばかりであつたらう。

それより以後、夫としての師の感化は、澄子をして益々男性的ならしめた。散髪となつたのも此の時である。此の頃から澄子の作品は、次第に聲價を博して、一ヶ月の収入は五六百圓に上る様になつたが、豪宕なる澄子夫妻は、贅澤を極めて、金ある時は、仕事を放擲して、鎌倉箱根と遊び歩いた。

或る時澄子は例の如く、柳橋にて豪遊を極めた末、男の弟子二三人を連れて、吉原に素見に出かけたが、弟子の中に、馴染の娼妓があつて、一同その儘登樓した。澄子は勿論座敷だけで歸つたが、其の敵娼に出でた小太夫といふ花魁が、澄子の水際立つた美男子で、先生くと、一同に敬はるゝを見て、深く之れに打込み、使ひ又は手紙で是非にと言ひ寄つた。これには流石の澄子も、持て餘して弟子をやり、其の男子ならざるを辯じて、諦めさせんとしたが、眞實と信じなかつたので、澄子自身に漸く納得せしめたといふ喜劇もある。此の外にも女で澄子に思ひを焦したも

のはまだ幾人もある。

澄子の性質が、磊落、豪放であつた爲め、遂に家庭は陥落し、東都の生活を厭ひ夫の止むるも聞かず、二十歳になる一人の女弟子を連れて漂泊の旅に上つたのは、明治三十九の秋、十月であつたが、零落せる師弟二人の懷中には、伊勢二見ヶ浦までの汽車賃を拂つて餘すところがなかつた。併し飽くまで豪放なる澄子は、女弟子の心配を氣にも止めず、途中衣類を賣り酒の料とし、程なく二見ヶ浦に着いた。

澄子は、其地の陶器窯元を頼りにして、女弟子と共に窯元の家を訪れ、窯元は喜んで二人を迎へた。それは澄子の非凡な手腕を知つて居るからである。師弟は此處に落ち着いて、二三月暮らしたが、取るだけの金は、贅澤に遣ひ果たし、馴るれば此處にも倦きて、又もや着の身、着の儘、此處を飛び出して、二人は備前に行き加賀に行き、臆て京都の六條に、世帯を持つ様になつた。

誰の目にも、男としか見えない澄子は、此處にても女の評判となり、其の金離れ

第六章 變態性慾に於ける男女の比較

の好い、水際立つたる男振りの澄子を女と知らずして、懸想する藝妓も少なくなかつたが、其の中にも、七條新地の初江といふのが、深く思ひを運び、女と知つてからも離れ難しと、毎日閑さへあれば、澄子の家へ來つて、勝手の働き甲斐くしく世説女房の役を勤め、愛情は濃厚であつたが、其の翌年澄子は東京に歸つた。

澄子が性質の磊落、豪放、總べての男性的な性格は、勿論素質もあつたであらうが、師なる塑像家の感化が大に影響して居る。さればと云ふて、年齢の距りある師との同棲は、假令師なる塑像家に熱烈な戀があつたにせよ、充分彼女を満たし得るものであつたか何うか、彼女が夫の止むるをも聞かずして、若き女弟子を伴つての漂泊、京都に於ける藝妓初江との同性の愛、顧みれば人間が要求する愛の半面に潜む、性慾と云ふ力強きものゝ存在が思はるゝではないか。

又、二十數年前に或る女賊があつた。此の女賊は年若き美人であつたが、彼女は其の頭髮は勿論、衣服より下駄に至るまで、男装をなし湯に入るにも、男子を装ひ

一度も女湯に入つたことはなかつた。

されば人みな男と思ひ、怪しむものは一人もなかつたが、一日如何なる機會にか浴場にて男ならざる事發見され、さすがの女賊も赤面して、逃げ出したのを、怪しと見たる刑事に捕へられ、悪事の數々悉く發覺するに至つた。

彼女の男装は、罪跡を晦まさんが爲めの手段にも供されて居るが、彼女は一の變態性慾者で、男装をなしたのは、その變態性慾を満たす爲めで、彼女は男を嫌ひ、却つて妙齡の女と同性の愛に陥つて共同生活をなして居つた。

女の變態性慾の實例

同性間性慾の外に、性的體部狂崇、性的庶物狂崇、サチスムス、マソヒスムス、その他いろいろがあるが、女の變態性慾として、サチスムス、マソヒスムスが屢々報

告される。

サヂスミスは異性を虐待して性慾を満す色情狂である。これには非常に残忍なものがあつたが、あまり残忍なものを避けて、簡単な一例を擧げると女學校を卒業した或る女が乳母の息子である奇麗な少年を愛して、其の少年を始終手馴付けて居るが、不意に少年をつねつたりして見る。少年は主人のお嬢さんなので、聲を立てゝは悪いと、「痛い」とも云はず、顔をしかめておつと、我慢して居るのを女は嬉しがつたり、又は野原で少年と共に散歩して居る時、不意に後から叩いて、少年が吃驚して倒れる程駆け出すのを喜んで見て居たりして居ると云ふ女があつた。マソヒスミスはその反對に、異性より虐待されて快感を味ふもので、此の種のものはヒステリー性の婦人に多い。

第七章 男女性の争闘

自然的生括

埃國の詩人的哲學者 エミル・ルカが、其著エロスに於て、有史以前の原始的人類は唯利那にのみ生きて居た。多量の食糧があれば、明日か明後日には我が身の上にめぐり来る運命である飢餓をも意とせず、飽く迄これを貪食した。彼等は汎く考へることも出来ねば、又永續的に考へることも出来なかつた。單に卒然の行動で、而も直ちに忘却さるゝ肉體の抱合と、其後計算されぬほど時日を経過してから、其の種族中の一婦人が兒童を生み落とす云ふこととの間に連鎖があらうなどは、彼等の思ひ寄らぬ所であつた。彼等は妊娠と出産との現象を見て、之を魔法の所業の如く考へて居た。一般に或婦人が或兒を連れてあるいたり、抱いて乳を吞ませたりする事實に依つてのみ、其女が其兒を生んだことを記憶さるゝに過ぎなかつたと述べ

兩性の性慾及其差異

て居る。

斯る時代に於ては、男女の關係が不定であつて、誰が誰の妻であるといふ事が定まつて居なかつた。所謂群婚であつて、各婦人は恐らく其婦人の屬する部落内に於ては各男子の共有の妻であつたであらう。

此の時代には、男女兩性の間にさしたる懸隔がなく、兩性が同じやうに發達して同じやうに生きて居た。故に男も女も、氣樂に無邪氣に、自然の人としての生活をしたのであらう。

性の争闘の萌芽

エミル、ルカが「母と子との關係は自然に成立したものであるから、人類の最初の家族は母を中心として集り、母を以て自然の首長と看做した、此現象は生殖行爲と

出産との間の因果關係が、最早一箇の謎でなくなつた後までも依然として繼續して地中海に臨める總ての國々、就中リシヤ、クリート及び埃及等に於ては、國家なり家族なりに於ける、婦人の優勢といふことが能く現れて居る。こは又、東方諸人種——セミテイツク及びアリアナーの自然宗教にも見られ、特に希臘神話に於ては、無類に其痕跡を發見することが出来る」と云ふて居る。

自然生活時代に次いで來つたものは、女子政治時代、即ち母權時代であつた。それは自然生活時代に於ては、父子の關係が明瞭でない爲め、血統は總べて女子に依る事となり、遂に固定した母系制を生じ、女子の權勢は甚だしく優勝なものとなり、こゝに性の争闘の萌芽を至した。

ウエステルマルクは、フィンランドの近代人種學者であるが、人類の最初の社會が母親を以つて自然の首長と看做した、所謂母系的社會であつたことは父親といふ概念が母親といふ概念に比べて、遙かに遅れて成立つたことを説いて居る。

兩性の性慾及其差異

壓倒されし女性

蒙昧時代に於ける群婚の間にも、一時的には、一人の男子と一人の女子とが、他の男女より離れて住む場合があつた。其の場合だけを見れば、彼等も亦た一夫一婦の生活をして居るが如く思はれた。又群婚の間にも、自然に本夫本妻と云ふ様な關係で生れて來た。斯くして群婚の狀態が、自然に一男一女の偶婚に移る様になつて來た。

偶婚に移り更に一層確實なる一夫一婦に移る様になつては、これ迄優勢であつた男の権力が衰へて、女は男の暴力に束縛さるゝ様になつた。此の時代には男が女を金で買つて妻とする賣買結婚や、力任せに女をさらつて來て妻とする奪掠結婚などが行はるゝやうになつた。

此時代には女に自由と云ふものは毫もなく、夫は妻を一つの品物として取扱ひ、夫と妻との關係は、主人と奴隸のそれに異らなかつた。且つ總べての財産が男の所有であるとなつた。男女の分業と祖先を崇拜する風が盛んになれるにつけて、家長制度が興り、漸次に男の権力が強くなり、長年同棲した妻とても嫌になれば男が勝手に離婚し、甚だしいのは妻を殺したり、賣つたりする権力さへも公に認められる様になり、女は家庭にも又社會にも其地位を認めらるゝ事がなかつた。

宗教賣淫の起原

自然生活の群婚より、偶婚に移り一夫一婦に移りたる後までも、群婚の遺風がなほほのめいて居つた。

ルカに據れば「地中海々岸の諸國並びに印度パヒロニア等に於ては、アドニス、ダ

兩性の性慾及其差異

イニサス、ミリツタ、アスタート及びアフロダイト等の神々のために年々催された春の祭禮は飽くなき荒淫と生殖力の盲目的放出とを以て禮とした。女は何人と雖もそれを要求する男子を拒むことを許されない。全部落は擧つて情熱の赴くがまゝに狂奔して、以て地の活力の蘇生を觀呼した」とある。

箇様に一定の時期を定めて性交を開放する事は、群婚時代に於ける古き習慣の名残りであると説かれて居る、或學者は是れを人間が昔他の動物と同じく交尾期を有して居た、其の遺風だと説明して居るが、一寸首肯し難い。

昔バピロニヤの婦人は、一年一度、ミソタの神殿に於て一般男子の自由になつた。其の近傍の他の諸國民の間にも、若き娘をアイサスの神殿に數年間起居せしめて、好める男子と自由の交りを爲さしめ、其の後に於て初めて結婚を許す風があつた。

是れも人に身を任せるに就て、初めは一年一度なりしものが、後には生涯に只一

度となり初め結婚後に於て爲されたものが、後には結婚前になされる事となつた。此法は遂に又一轉して、一般男子の自由になる代りに、或一人乃至は數人に税を納める様になつた。即ち或る人種の間では會長とか僧侶とかい、此の女子を受けるのである。又或る人種の間では、結婚式の來客は嫁君を自由にするの權利を有し肝腎の婿君は最後に其の嫁君の手を取る事を許される。是れが應て賣淫の起原をなしたのであるが、神殿に於て行はるゝ賣淫を宗教賣淫と稱するのである。

婦人の掠奪、賣買

家長制度の時代に於いては、賣買婚、奪掠婚の行はれた。

或る人種に於いては、青年が其妻を得んと欲する時、友人等の力を借りて女を奪掠し、友人等をして順次に其の少女に接せしめ、然る後初めて、之れを己が宿の妻と

兩性の性慾及其差異

第七章 男女性の争闘

する風習がある。又或る種族に於いては、男が妻になさんと目ざしたる女の父親に向つて自己の友人等をして妻貰受けの談判をなさしめ、其最中に本人は馬を卒ゐて窃かに其家の近傍に潜み、巧みに女を奪ひだし、馬に乗せて逃げ歸へる、娘の家の人々は喚き叫んで追ひ掛けるを、男は一生懸命馬上の女を守護しながら、手近き森林に逃げ込んで居る。それが即ち結婚の儀式になつて居る。

此の奪掠に次いで起るものは即ち賣買婚である。女子は他の財産と同じく家長たる父の私有物であるが故に、濫りに之れを奪はれて黙して居る筈はない。必ず之れに對して復讐を行ふか、或は賠償を要求する。賠償は即ち賣買の始めである。而して賣買結婚の一般に行はれ居る處にては、奪掠結婚は只だ儀式の上のみに存し、又賣買婚も漸く廢れたる處にては、只進物贈答などの事が賣買婚の名残として儀式の上のみに存して居る。

希臘の婦人奴隷

希臘の神話の中に現はれたる女神が、男子に對して其の地位の頗る高かつた事を見れば太古に於いて女權の隆盛であつた事を窺ふに足るものである。然るに歴史時代に入つて、所謂上古の英雄時代となれば、女子の地位は全く男子の爲めに蹂躪されて居る。戦争に於いて捕虜となつた若い女子の如きは、悉く戦勝勇士を慰藉する爲めの玩弄物即ち奴隷とされて居つた。捕虜の若き女は、戦勝勇士の論功行賞には無くてならぬものとされ、勇士等は戦功の等級に従つて、捕虜中から好む美女を撰み取つた。之れが爲めに捕虜の美女を争ふ男子の間に狂態を演ずる者も屢々あつたが、勇士等の妻は夫の斯かる亂行を爲すを見ても、只黙してそして自分のみが何處までも節操を嚴守せねばならぬのであつた。

英雄時代以後の希臘は、ドリアン人とアイオニアン人とに依つて、兩性の關係に

兩性の性慾及其差異

於いて其趣を異にして居つた。

ドリアン人を代表するものは、スバルタ人であるが、スバルタには或點に於いて群婚の趣きを存して居つた。最初の妻に子がなければ、更に第二第三の妻を娶るのは普通の事で幾人の妻をも一家内に同棲せしめて居た。又數人の兄弟が一人の妻を共有する事もあり、友人間にて其妻を共有する事さへもあつた。或ひは又、子を得んが爲めに一時自己の妻を他人に貸す事もあり、性交の事は餘程自由であつた。

アイオニア人を代表するものは、アデン人である、アデンに於ける兩性關係はスバルタとは全然異つて居た。アデンの女子は紡織裁縫を主として學び、上流の家庭の婦人のみが多少文字の教育を受けた。而して女子は家庭にのみ引籠り、婦人の間に於てのみ交際する事は毫も許されては居ない。故に女子の居室は二階又は家内の奥深くに在り、主人以外の男子は假令何人にも男子の入る事を禁せられ、若し男子の來客があれば女子は皆な居室に隠れ決して他家の男子に顔を見せなかつた。外

出するに際しても女子は決して獨りで外出する事がない。必ず女奴隷を伴に連れねばならず、其の居室に在つても常に必ず嚴重に監督され警衛されて居た。

希臘の家庭婦人

雄辯家として有名なるデモスゼネスは、「我等は嗣子を得んが爲に、及び忠實なる家事の監督者を得んが爲に結婚す。次に日用の小間使として數人の妻を置く。而して戀の樂しみの爲に彼のヘテレーを求む」と言つて居る。以つて希臘に於ける女子の地位を窺ひ得るであらう。

而してヘテレーとは何であるか即ち是れは今日の藝者に似たものである。爾來ヘテレーと云ふのは希臘の女神で、此の神の巫女達が後に賣淫をする様になり、ヘテレーと稱せられた。

希臘の一般家庭の女子は常に深窓に閉籠り、公會の席などには固より足踏みする事なく、外出して町を行くにも必ず覆面を着け、衣服なども極めて質素なものであつた。併しヘテレーは之れに反し、常に装を疑らして精神武將等の交際社會に侍り、其の才藝と美貌とを以つて、名聲を馳らすものさへあつた。故に當時の風流才子は、家庭に於いて其の妻を愛するを耻となし、外に出で、ヘテレーに狎れ睦み、あらゆる戀の戯れを爲して居つた。

スパルタに於いては、社交が稍自由で、女子が稍尊敬されて居た故、曾て姦淫の聲を聞いた事は無かつた。アデンス婦人は常に深窓に押込められて、全く他の男子と交際する事が出来なかつたが、それでも姦淫沙汰を聴く事が多かつた。

是れは男子が其の妻を束縛して置きながら、自分は外に出てヘテレーと戯れて居る結果、女子も自然に其夫を欺くに至るのである。そうすると、男子はそれに備へる爲番犬を附けたり、去勢した宮人をして見張を爲さしめたり、嚴重に妻を警戒

する事になる。そして若し姦淫を發見せる場合は、直ちに引捕へて奴隷に賣つたり其外残酷な刑罰を加へたものである。

男子の賣淫、女子の姦淫、筒様にして希臘時代に於いて性的道徳が漸次に破壊されるに至つたが、更に尙ほ特筆すべきは男色である。希臘の男色は餘程盛んなもので、アリストートルの如きは大いに之れを奨励して、女色の避くべきを説き、之を目して教育ある人士の特權だと叫んだ程である。そして女色の娼樓と相並んで、男色の娼樓が存在した程である。

女性の屈従と墮落

羅馬に於ける兩性關係も亦、夫は妻の所有なりと考へ、女子は獨立の意志を有せざると云ふ思想を以つて、女子を束縛して居た。

併し羅馬は流石に世界的大帝國を建設するに至つた人種程あつて、希臘人よりも襟度の廣いものがあつた。同じく女子を束縛するにしても、羅馬人は希臘人の如くに番犬を附けたり、去勢の宮人を附けたりする様の事はなかつた。それは羅馬人は別にそれ程までの壓迫を加へずとも、女子の貞操は自然に守られるものと信じて居た故である。

併し羅馬が漸く強大となるに及び、奢侈遊惰の風國內に漲ると同時に、其首都は淫樂の中心となり公認の遊廓の創設さるゝもの頗る多く、上流社會には獨身なる遊野郎多數に生じ、又所謂貴婦人なるものは、娼妓監督に藉口して自身も亦妓籍に列し、男も女も日に夜に歡樂の夢を貪つて居つた。

故に後には、結婚を奨励する爲に獨身を罰する法律や、身分あるものゝ娘は娼妓たるを禁ずる法律や、又有夫の女子にして娼妓の鑑札を有する者は、姦通者として之れを罰すると云ふ法律なども、制定さるゝに至つた。

宗教も女性を救はず

羅馬の人々が放態度なく、墮落の深淵に陥つて居る際に、羅馬領の一部落たるガリラヤのナザレに基督耶穌が誕生した。三十歳にしてバプテスマのヨハネに洗禮を受けた基督は、氣魂ながら長鯨の如く、直ちに天國の宣傳を叫んだ。

希臘羅馬に於ては、前にも述べた通り女子を輕卑したのであるが、基督は是等と全く異り、博愛主義の上から女子を男子と對等に看做し、舊約の思想を脱したものである。

創世記を見るに、アダムの肋骨一本を取つてイバを作つた、それが最初の女性なりとして女子は男子に對して從屬的地位に置かれた。モーゼの十誡を見ても、奴婢家畜などと並で人の妻の事が書いてある、當時の猶太の思想としては、女は正に

財産の一部と見做されて居たのであるが、基督はそれより脱して男子と平等なものを見た。

併し基督の使徒だちに於いてさへ、基督の此の思想を曲解した様な傾がある、ポロの如きは「男は女に近ざるを善とす」「人の頭は基督にして、女の頭は男なり」と云ふた。

漸次に年代を経るに至つては、基督教徒の間に於いても、女子を貶すること愈々甚だしく、曾て「女子は人間なりや如何」と云ふ様な、突飛もない問題が、中世時代の宗教會議に於いて、眞面目に討議せられたことすらあつた。

テルツリマンといへる人は、「世の女どもよ。お前達は何故に、身に喪服を着け涙を浮べて歩かぬか。お前達の爲めに、人類は墮落したではないか」と言ふた。又、ヒエロニムスといへる人は、「女よ、汝は地獄の門なり」と罵つた。

中世に於ける女性尊重

今迄は野蠻時代の、男性政治時代の延長と見るべきものであつたが、是れより以後は、女性尊重時代とも稱すべきものである。

羅馬の國が亡びた時、剛健なる獨逸民族が侵入して來たが、獨逸民族の兩性關係は羅馬人のそれとは餘程異つて居る。

獨逸民族に於ける一夫一婦の制は可なり嚴重であつた、只會長株のみは猶多妻を有して居つた。そして女子も時としては社會の公けなる事に携はり、一般の尊重を受けて居た。

獨逸民族が、羅馬亡國の跡に侵入して、其の亡國の文明と、獨逸民族の清新の氣とを結合させた時、そこに初めて婦人尊重の實を擧げて一婦制の發現を來した様に

思はれる。

女性を貶し、女性を罵つた基督教徒が、後に至つて稍婦人を尊重する風の生じたのは、全く獨逸民族の感化であると説かれて居る。即ち獨逸人の間には盛んに種々なる女神を崇拜して居つたので、獨逸人の間に基督教を擴める必要上、基督教に於いてもマリア崇拜の風を立て、是れが遂に女性尊重の實をなすに至つたとの説をなす學徒がある。

獨逸民族に依つて婦人尊重の風をなすに至つたが、中世騎士の時代に於いて一層婦人が尊重されるに至つた。此の時代に於いては弓矢執る武士が、先づ何よりも先きに婦人を保護し、敬愛しなければならなかつたのである。

此の時代には、漸次に祖先崇拜の風が衰へると共に、父の權利を重く視らるゝやうになり、社會上は元よりの事、法律上にも婦人の權利が段々と認められるやうになつて來た。

箇様に女性が尊重されて來たが、結婚に就ては未だ戀愛を基礎としたものではなかつた。一體男女兩性が結合を求めるとは、其の本能からであつて、本能の發現が戀愛であるとするれば、假令群婚でも又偶婚でも、其の間に戀愛が無いとは云はれない。併しそれ等は性的戀愛として眞に強いものではなかつた。

中世騎士の時代に於ける、青年男女の結婚は言はゞ個人と個人とが結婚するのでなく、家と家とが結婚するのであると云ふ方が適當である。故に其の個人の人格を重んずると云ふよりは、寧ろ其の家の家柄を重んずる事になつて居る。そのみならず法律の上、又貞操問題などでは、何うしても男の方に割がよくて婦人には損であつた。

で、婦人は表面非常に尊ばれて居り乍らも、まだ根本から婦人が社會的地位を占めるなど云ふ時期には至らなかつた。